

The ICU

学報
No. 30
June
2012

Special Feature 1

東北の人に 新しい家族アルバムを

New Family Album for People in Tohoku

Special Feature 2

「これからは卒業生が ICUを支える番だと思う」

“Think What Graduates Can Do for ICU”



初夏の陽ざしあふれる昼休み
学生たちが大学食堂へ向かう

Under early summer sunshine,
students are walking toward
the Dining Hall.

学報「The ICU」30号

2012年6月

“The ICU” No.30 June 2012

国際基督教大学 (ICU)

〒181-8585

東京都三鷹市大沢 3-10-2

E-MAIL: pro@icu.ac.jp

<http://www.icu.ac.jp>

International Christian University (ICU)

3-10-2, Osawa, Mitaka-shi,

Tokyo, Japan 181-8585

目次 contents

- 4 就任のあいさつ 学長 日比谷 潤子
Inauguration Message President Junko Hibiya

- 6 **Special Feature 1**
東北の人に新しい家族アルバムを
New Family Album for People in Tohoku

- 10 2011年度ICU生の進路状況
Placement for CLA Graduates in 2011

- 14 **60th Anniversary Project**
第1期 ICU Peace Bell Scholar 報告会 開催
First ICU Peace Bell Scholars Review Meeting

- 16 **Special Feature 2**
**「これからは卒業生が
ICUを支える番だと思う」**
“Think What Graduates Can Do for ICU”

- 20 **Message from ICU Faculty/Staff**
研究室訪問 岩切 正一郎 教授(文学メジャー)
Professor Shoichiro Iwakiri (Literature)
教職員だより アカデミックプランニング・センター
Academic Planning Center

- 22 **Graduates Today**
卒業生は今 星野 博美さん(作家)
Hiromi Hoshino (Writer)

- 26 **News**
大学、高等学校、同窓会、JICUF
University, High School, Alumni Association, JICUF

- 34 **Friends of ICU**
ICUへのご支援 Support for ICU

- 42 **新 ICU Peace Bell Scholar の紹介**
Introducing 2012 April ICU Peace Bell Scholars

企画：学報編集委員会

編集：行政事務部パブリックリレーションズ・
オフィス

©国際基督教大学 2012

本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

“The ICU” Editing Committee
Public Relations Office, Administrative Affairs
Division

©International Christian University 2012

Reproduction in whole or in part without
permission is prohibited.

学報編集委員会

日比谷 潤子(学長)

森本 あんり(学務副学長)

石塚 雅彦(同窓会大学担当副会長)

清水 勇二(学生部長)

原 礼子(湯浅八郎記念館 館長代理)

“The ICU” Editing Committee

Junko Hibiya (President)

Anri Morimoto (Vice President for Academic
Affairs)

Masahiko Ishizuka (Vice President, Alumni
Association)

Yuji Shimizu (Dean of Students)

Reiko Hara (Acting Director, Hachiro Yuasa
Memorial Museum)

■学報「The ICU」送付先の変更について

在学生保証人の皆様は、教務部にて学生本人に
よる所定の手続きが必要です。

同窓生、Friends of ICU会員、その他関係者の
皆様は下記の法人業務部までご連絡ください。

Please e-mail us at the e-mail address below if
you need any changes made in your address.

TEL : 0422-33-3041

FAX : 0422-33-3763

E-MAIL: addresschange@icu.ac.jp

※同窓生の皆様よりご連絡先情報変更のご連絡を頂
いた場合、特にお断りのない限り、同窓会にもその
情報を連絡いたします。あらかじめご了承ください。

学報「The ICU」のバックナンバーは
ホームページでも閲覧できます。

<http://www.icu.ac.jp/info/theicu>



人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。
(旧約聖書口語訳「詩篇」8篇4節)

What is man, that thou art mindful of him?
(Psalm 8:4, King James Version)

ハーヴァード大学哲学部の建物正面に掲げられた言葉。古の詩人は、自分に与えられた途方もなく大きな恵みを知っているが、同時に自分にはそんな恵みをもらう理由が何もないことも知っている。その謙虚な驚きが感謝となり、神への問いかけとなっている。賜物が大きければ大きいほど、責任も大きい。昔も今もエリートの集まる最高の学府でこそ、聞かれねばならない言葉である。

学務副学長 森本 あんり

The line is inscribed above the entrance of Emerson Hall, Harvard University, where the Philosophy Department is housed. The Psalmist knows the magnitude of grace bestowed upon him, but he is keenly aware that he has nothing to merit such divine favor. In humble amazement and gratitude, he turns to God and asks why. Great gifts call for great commitment, and great talents, for great sacrifice.

Vice President for Academic Affairs Anri Morimoto

就任のあいさつ

学長 日比谷 潤子



私は2002年4月、本学に着任しました。当時の絹川正吉学長は第8代、次の鈴木典比古学長の後を受け、このたび本学10人目の学長に就任いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本稿では、私が描く大学像、ICUをこのような大学にしていきたいという思いを3点、お伝えします。

あらためて言うまでもなく、本学はキリストの福音によって立つ大学です。一人一人を大切にするというこの大学のよき伝統は、私たちが皆等しく神の子であるというキリスト教の本質を具現化したものに他なりません。ICUはどのような大学ですか、と問われたら、私はまず一番に、「一人一人の可能性を最大限に引き出す大学」と申し上げたい。人間は誰も、神から、特別な賜物を与えられています。自由な時間に恵まれる学生時代は、さまざまな経験をとおして、自分がどのような賜物を授かったのかをじっくり考えるための期間です。教職員は、学生がそれぞれ自分の受け取った賜物に気づき、それを伸ばしていくプロセスを全面的に支援します。

次に、第1の点と密接に関連しますが、「それぞれが自らの使命を見出せる大学」を目指します。4月3日に行われた入学式では、新入生のみなさんに、自分が神から何を授かったのかを意識することによって、自ずと将来進むべき道も見えてくるだろうとお話しました。最近、キャリア教育ということばをよく聞きます。これは、もちろん、就職活動のことではありません。私は、キャリアとは、社会の中で職業を通じて自分の役割を果たすことだと考えています。ICUは、国際的社会人としての教養をもって、神と人ともに奉仕する有為の人材を養成することを目的として設立された大学です。仕事をする目的は人によって異なりますが、本学の学生には、卒業後の進路として、授かった賜物を、自分自身のためではなく他者のため、社会のために生かす道を、ぜひ選んでほしいと願っています。迷わずにこのような選択をするには、強い使命感を持つことが重要です。私たちは長年にわたって、学生が自らの使命を見出すプロセスを促すようなカリキュラムや各種プログラムを提供してきました。これらはICUの特長、強みです。今後も、この分野のさらなる充実を図っていきたいと考えています。

最後に本学が第二次世界大戦への深い反省から献学された時、湯浅八郎初代学長をはじめとする先人は、「永遠に未完成の大学」として、「明日の大学」を目指すことを宣言しました。このモットーを今後も堅持し、「理想を求めて成長し続ける大学」でありたい。ICUは、戦争直後の荒廃の中、未来を信じた無数の人々からの寄附によって設立された大学です。このことは、ずっと語り継いでいかなければなりません。理想を、より高く、より深く追求することによって、「未完の大学」に希望を託してください。さった方々の祈りに応えていく所存です。

Inauguration Message

President Junko Hibiya

I joined ICU in April 2002. At that time, Dr. Masakichi Kinukawa was serving as the eighth president. He was followed by Dr. Norihiko Suzuki, and now, in turn, ICU appoints its tenth president.

In this article, I would like to mention three ideas on the kind of image I have of the ICU I hope to work towards creating.

It hardly bears repeating that ICU is a university that stands in accord with the Gospel of Jesus Christ. The great tradition at ICU, treating each individual with care and kindness is unparalleled as something which realizes an essential quality of the Christian faith, namely, that we are all equal as children of God. When I am asked what kind of university ICU is, I want to say, “it is a university where each individual’s potential is brought to fruition.” All men and women, without distinction, have been given special gifts from God. The years at ICU will be a period in which every student will discover how the gifts each one possesses differ from those of others. The work of ICU’s faculty and staff is to support students in the process of realizing and expanding their gifts.

Secondly, flowing from the above, I aim for ICU to be “a university where each individual discovers his or her calling.” Addressing the incoming class at the matriculation ceremony on April 3, I emphasized the following point: gaining an awareness of their individual gifts, they may become aware of their own mission. Nowadays, the expression “career education” is common parlance. Needless to say, this cannot be equated merely with the process of finding the job you want after graduation. A career is the role we fulfill in society through work. ICU was founded with the aim of “cultivating superlative individuals, who serve both God and humanity and who have been educated as internationally minded citizens.” While everyone possesses different aims in their work, I trust that all students during their time at ICU will realize what those gifts are and choose a path that makes greatest use of their gifts, not for themselves, but for others, for society. To make this kind of choice, it is important to have a sense of calling. ICU’s curriculum and its various programs urge students on through the process of discovering their mission. I hope to make further improvements to these areas.

When ICU was founded, in the spirit of deep reflection, at the end of World War II, our predecessors, such as the first president, Dr. Hachiro Yuasa, proclaimed ICU’s aim to work towards “a university of tomorrow” in a perpetual endeavor to perfect the institution. I will continue to adhere to this motto and have ICU be “a university that continues to mature as it pursues its ideals.” It is a university that rose from the ashes of World War II through the donations of countless individuals who had a belief in the future. This is something we must continue to tell people. By pursuing these ideals of greater height and depth, I believe it is possible for us to respond to the prayers of those people who were the first to place their hopes in an “unfinished university.”

東北の人に 新しい家族アルバムを

ICUの留学生と卒業生が参加するボランティア活動



中央が留学生のアリソン・クウェッセルさん。
左が卒業生の吉川優子さん。



2012年3月6日付の
The Japan Times
に掲載されました。

東日本大震災から1年以上が経ちました。ICU生はさまざまなかたちで被災地の支援を続けています。今回は、海外からの留学生が参加しているボランティア活動の一例をご紹介します。

自分たちにも何かできないか 始まりは、一人のICU卒業生

ICUの卒業生、吉川優子さん(旧姓:中部、CLA50期、ID06)はフォトエージェンツとして、外国人プロカメラマンによる子どものポートレート写真撮影に携わっていました。東日本大震災の後、自分にも何かできないだろうかと考え、ファミリーフォトチャリティを開催し、写真撮影によって得た収益をあしなが育英会に全額寄付しました。

「イベントとしては成功しましたが、私の中にはどこかもやもやした気持ちが残りました。お金だけの寄付は一時的な支援です。もっと日常的に支援を続けていく方法はないだろうかと考えました。多くの人が津波で家族写真をなくしたことはニュースなどで知っていました。それなら、新しい家族写真を東北で撮ってあげたいと思ったのです」と、吉川さんは語ります。

そして、昨年9月、もっとも津波の被害が大きかった石巻へ車で向かいました。途中、「写真をもらっても、アルバムを持っていないかもしれない」と、大型電気店でアルバムを何冊か買い込みました。さらに、「アルバムをもらっても自分のカメラを持っていないかもしれない」と気づいて、車中からフェイスブックを通じて使わなくなったデジタルカメラをゆずってくれるように呼びかけたそうです。こうしてPHOTOHOKU※の活動は動き出しました。

※PHOTOHOKU=Photograph(写真)×Tohoku(東北)

■非営利団体

PHOTOHOKU(フォトウホク)

<http://www.photohoku.org/jp/>

問い合わせ:Yuko@photohoku.org



撮った写真は、すべておいていく シンプルだから気持ちが伝わる

PHOTOHOKUの活動には大きな特徴があります。それは、プロのカメラマンがインスタントカメラで撮影することです。インスタントカメラにはデータが残りません。撮影したらフィルムを引き出し2分程たってから紙をはがすと写真が現像されるので、その場で相手に手渡すことができるのです。

自らフォトジャーナリストでもあり、現在はロータリー世界平和フェローとしてICUの大学院で学ぶアリソン・クウェッセルさんはPHOTOHOKUの活動に参加して、このように話してくれました。

「震災後メディアは東北で悲しい写真をたくさん撮り、世界中に配信しました。中には、被害者として撮られることに身構えてしまう人たちもいます。でも、インスタントカメラで撮影した写真なら、あなただけのために撮った、この世に1枚しか存在しない写真だということが相手にも伝わるのです」

写真を受け取って、笑顔になる人、涙を流す人、PHOTOHOKUのメンバーはさまざまな感情を目の当たりにしてきました。たった1枚の写真がもたらす影響力をアリソンさんはこう語ります。

「私はジャーナリストとして、世界中で取材をしてきました。例えば、自然災害の取材の場合、自分の記事を読んでもっと多くの人が寄付をしてくれるかもしれない、政府が政策を変更してくれるかもしれない。やがては取材した相手に良い影響を与えられるかもしれない。でも、それはとても間接的で時間もかかります。一方、PHOTOHOKUでは、撮った写真を

手渡すと、その場で相手に喜んでもらえます。直接人と関わっていると実感できます。このような経験は初めてだったので、とてもやりがいを感じています。これまでに3回参加しましたが、次に東北に行くのが待ち遠しいです」

ここで掲載している写真は、活動のPRのために了解を得てオリジナルの写真を複写したものです。

辛い出来事の後も人生は続く 大切な瞬間を写真に残してほしい

PHOTOHOKUのもう一つの特徴は、撮影した家族に何度も何度も会いに行くことです。インスタントカメラで撮影した写真は高品質で、ずっととっておけるものです。その写真を40ページもある厚いアルバムの最初のページに貼ってプレゼントします。自分たちでも残りのページに写真を貼っていけるように、もしもその家族がカメラを持っていなかったら、中古のデジタルカメラをあげます。そして、次回訪れたときに撮りだめた写真のデータがあればプリントアウトして渡します。

「津波ですべてを無くした人たちにとって、カメラが一番最後に買うものなのかもしれません」と話すのは吉川さん。「カメラは高価だし、なくても生きていけるものです。でも、辛い出来事のあとにも人生は続きます。私たちが半年前に石巻で出会った赤ちゃんが、この前会ったときはよちよち歩きをするようになっていました。もしもカメラがなかったら、その大切な瞬間を残すことはできません。成人式や、卒業式、入学式を迎える子たちもいます。定期的に訪れることで撮影した家族との間に関係が築かれ、私たちも責任を持つてずっと関わっていくことができるのです」

PHOTOHOKUの活動は石巻からスタートし、気仙沼や、福島県相馬郡の新地町へも活動を拡げています。特に新地町では、原発事故の影響でメディアやボランティアの数も少なく、地元の人々は「自分たちは忘れられている」と感じているそうです。PHOTOHOKUでは、今後もこうした人々のために活動を続けていきます。



PHOTOHOKUのおかげで、 私にとって日本は とても大切な場所になりました

Japan Has Become a Very Important Place
Thanks to PHOTOHOKU



アリソン・クウェッセル (ICU大学院生)

米国テネシー州出身。2011年9月に、ロータリー世界平和フェローとして来日。ICU空手道部所属。

Allison Kwesell (ICU Graduate School)

From Tennessee, USA. Came to Japan in Sept. 2011 as a Rotary Peace Fellow. Belongs to ICU Karate club.

私は10年以上フォトジャーナリストとして活動しています。これまでに、紛争地域で難民を取材したり、自然災害を追って世界各地を訪れました。東日本大震災のことはインドに住んでいるときに知りました。ジャーナリストなら、大災害が起きたときは現地に入りますが、自分はICUで勉強するために日本に行くことが決まっていた。何かに関わりたとは思っていましたが、東京で何ができるの分かりませんでした。昨年8月に来日し、ICUに入学して空手道部に入りました。そして、9月のICU祭で、空手道部のOGとして遊びに来ていた吉川優子さんと偶然出会ったのです。私がフォトジャーナリストだと知った彼女は、PHOTOHOKUに参加してみないかと誘ってくれました。

前回、石巻の仮設住宅を訪ねたときにこんなことがありました。おばあさんとお孫さんの写真を撮ろうと思って、仮設住宅の前に座ってもらったのです。撮影が終わってインスタントカメラのフィルムをめくり、現像ができあがるまでの2分間に、私はどんどん不安になっていきまし

た。「この写真は失敗だ、どうして仮設住宅の前で撮影してしまったんだろう。これではあまりにも悲しすぎる」と思ったんです。ところが、おばあさんは私の撮った写真を見て、「この家の前で撮ってくれてうれしい」と言ってくれました。「この写真は自分たちが経験してきたことの証になる。ここから前に進むんだ」と。とてもポジティブな言葉に感動し、私自身も励まされました。私は世界を旅してきましたが、日本人には辛い出来事を克服する誇りや、強い精神力があると思います。東北に行くたびに、少しずつですが状況が良くなっていると感じます。

今、私は人生の中でもっとも重要な時を過ごしていると感じています。今までのように、被災地に行って写真を撮ったら帰ってくるというのではなく、私は東京に住みながら、これからも何度も東北に戻って、彼らの変化を見守りながら人間関係を築いていくことができます。PHOTOHOKUのおかげで、私にとって日本はとても大切な場所になりました。

ロータリー平和フェローシップとは

国際ロータリーが世界平和の実現と紛争の解決に寄与する人材育成を行うことを目的に設立した奨学金プログラムです。選出された世界平和フェローは、国際ロータリーが提携する世界7大学で修士号、もしくは専門能力開発修了証を取得します。アジアでは、ICUが唯一の修士号を取得できる指定校です。

What is Rotary Peace Fellowship?

It is a scholarship offered by Rotary International aiming to foster leaders who promote world peace and conflict resolution. In Asia, ICU is the only designated university, where Rotary Peace Fellow can earn master's degree.



国際ロータリーの会員誌「rotarian」にもPHOTOHOKUの活動が紹介されました。

I came to ICU last August and joined the Karate club. I met Yuko Yoshikawa in September when she came to visit the ICU Festival as a Karate club graduate. When she found out that I was a photojournalist, she came up to me and asked if I was interested in joining PHOTOHOKU.

One of the most touching stories was when I took the photo of a grandmother and her grandchildren in Ishinomaki. In the two minutes while the film was developing, I started to worry because I took the picture in front of their transitional home, a place that represents their sadness. I felt embarrassed and felt that it was a mistake, but when grandmother saw the photo, she said she was happy that it was taken in front of this house because it gave them a memory of what they have been through. This house is a point from which they will move forward. Those were such positive, encouraging words that show their pride and spirit to overcome. That was truly special.

I feel that this may be the most important time in my life. I am not just going to sad places and taking pictures and leaving, like I used to, but I am able to live here, build connections, continue to go back and see those people grow. Thanks to PHOTOHOKU, Japan has become very important to me.

New Family Album for People in Tohoku

International student and graduate of ICU take part in volunteer work

Over a year has passed since the Great East Japan Earthquake. ICU students have been supporting the areas stricken by the quake. This is one example of volunteer work by an ICU international student.

Is There Anything We Can Do? It All Started with One ICU Graduate

Yuko Yoshikawa (maiden name: Nakabe, CLA50th, ID'06) has been a photo agent working with foreign professional photographers who take children's portraits. Wondering if there was anything she could do after the Great East Japan Earthquake, she sponsored a family photo charity, and donated the proceeds to Ashinaga Ikueikai.

Yoshikawa said, "Monetary donations are only temporary, so I kept searching for ways to continue supporting people on a day-to-day basis. TV reported that many people had lost their family photographs, so I decided to take new family photos in Tohoku."

It was in September last year that they drove to Ishinomaki where the Tsunami damage was the gravest. "It occurred to me that people may not even have albums to keep the photos in, so we stopped on the way at a big electronics retail store and bought some." On the way, she logged onto Facebook to ask for donations of used digital cameras. This was how PHOTOHOKU got started.

Building a Relationship Based around Simple Photographs for Memories

One of the main characteristics of PHOTOHOKU is that professional photographers use instant cameras to take photos. With instant cameras, there is no digital data left on photographers' side. The photo is taken, film is pulled out, we wait for two minutes, and the

picture is developed and ready to be given away then and there.

Herself a photojournalist, and now a Rotary Peace Fellow studying at ICU, Allison Kwesell also talks about her involvement with the PHOTOHOKU.

"My background is as a working photojournalist in conflict areas as well as areas hit by natural disasters. If you cover a natural disaster as a photojournalist, it will affect the people only after a long time. Reading the article, more people may donate money or governments might change policies, but there is a long distance between where I work in the field and actually helping people in the region. With PHOTOHOKU, it is a blessing to take pictures and just give them to the people whose reactions are there to see right in front of you. Being able to touch the person in front of me is a new and different kind of aid for me. It is inspiring, because it makes me feel as though I am directly involved. I have made three trips so far, and am really looking forward to going back. It is like building a relationship based around simple photographs for memories."

We Want to Help People Keep Memories of Precious Moments in Photographs

"For someone who lost everything in a Tsunami, a camera might be the last thing they buy", said Yoshikawa. "It is expensive, something we can do without. Still, life goes on even after such a harrowing incident. A baby we met six months ago was already starting to toddle when we went back. Without cameras, such precious moments are



Photos on p06-p09 are duplicates of originals and are shown with the permission of PHOTOHOKU for the public relation purposes.

lost. Children will have Coming-of-Age day, graduations, and entrance ceremonies. As we go back to Tohoku regularly, we feel close connections with the families we have taken pictures of, thus enabling us to become truly involved over a long period."

PHOTOHOKU started in Ishinomaki, spread to Kesennuma, and to Shinchi-machi in Soma County, Fukushima. Especially in Shinchi-machi, the amount of media coverage and volunteers are relatively few because of the nuclear crisis, and people there feel that they have been forgotten. PHOTOHOKU will continue its effort in such areas.

2011年度ICU生の進路状況

グローバル採用時代の幕開け ICU生に高い期待

学生サービス部 就職相談グループ

■2011年度の概要

2011年度進路状況は、進路調査の回答者数665名(卒業生数691名)に対し、就職は429名(64.5%)、進学は130名(19.5%)という結果になった(表1)。進路調査は、2011年6月及び2012年3月卒業者に対して、在学中はさまざまな機会を通して報告書提出を呼びかけ、卒業後は未提出者全員を対象に電話による調査を実施した。

2011年度の就職活動を振り返る時、東日本大震災の影響が挙げられる。一部の企業は予定通り選考を開始、進めた一方で、2カ月程度選考期間を繰り下げた企業もあり、ICU生が毎年多数応募する企業／業界も含まれていた。その結果、選考へのモチベーション維持に苦悩する学生の姿も見受けられた

一方で、今後数年続くであろう復興に伴い改めて進路について考える契機とした学生もいた。選考期間が分散したことは、海外留学・交換留学から帰国した学生も含め機会の増加につながったと思われる。しかし、最終学期と選考期間が重なる6月卒業生には例年にも増して厳しい状況となった。

また、グローバル採用時代の幕開けという視点では、世界を舞台に活躍できる人材としてICU生に寄せられる期待は例年通り高かった。

就職に関して、就職率(就職希望者数に対する就職(常勤)者数)は91.9%で、概ね例年通りとなった。就職動向をみると(表1)、就職先業種で最多はサービス業123名(就職者の28.7%)、次いで製造業94名(同21.9%)、卸・小売業47

名(同11.0%)、金融・保険業43名(同10.0%)と続き、「2011年度教養学部上位就職先」を見ても、幅広く進路決定していることがわかる(表2)。就職活動のスタート期には多くの学生が働くことの意味として「社会貢献」を挙げる。その後、具体的に自らの可能性について考え、学び、能力や個性、課外活動、各々の学生が育まれた環境等の資源を統合し、考え抜き、選択した結果が見て取れる。

進学に関しては進学率19.5%で、平成23年度文部科学省学校基本調査にある進学率12.8%を上回る。進学状況をみると(表3)、東京大学大学院が最も多く28名、一橋大学大学院13名、次に本学大学院9名となり、順位こそ入れ替わるが近年の状況と変わらない。

表1 2011年度教養学部卒業生進路

	合計 (名)		
	男子	女子	計
就 職(常 勤)	123	306	429
農・林・漁・鉱業	1	0	1
建設業	0	1	1
製造業	32	62	94
電気・ガス・熱供給・水道業	1	1	2
運輸・通信業	17	22	39
卸・小売業	8	39	47
金融・保険業	13	30	43
不動産業	0	2	2
教育	7	21	28
マスコミ(新聞・出版・放送・広告)	6	9	15
サービス業	28	95	123
非営利団体	3	9	12
公務	6	8	14
その他の就職	1	7	8
就 職(常勤以外)	8	11	19
進 学	50	80	130
【大 学 院】	47	60	107
国内	42	48	90
海外	5	12	17
【大 学】	2	7	9
国内	2	7	9
海外	0	0	0
【その他の進学(専修学校など)】	1	13	14
*他(資格試験、海外受験結果待ちを含む)	34	53	87
回 答 者 数	215	450	665

回答者数665名／卒業生数691名

表2 2011年度教養学部上位就職先

		(名)
アンダーソン・毛利・友常法律事務所	5	KDDI 2
三菱東京UFJ銀行	5	ゴールドマン・サックス 2
ワークスアプリケーションズ	5	財)国際開発センター 2
全日本空輸	4	島田商事 2
日本放送協会	4	ジュピターテレコム 2
楽天	4	新日本有限責任監査法人 2
インテリジェンス	3	大和証券 2
エル・ティール・エス	3	ディー・エヌ・エー 2
新生銀行	3	帝国ホテル 2
JTBグループ	3	TOTO 2
トーマツグループ	3	トレンドマイクロ 2
ファーストリテイリング	3	日本アイ・ビー・エム 2
みずほフィナンシャルグループ	3	日本オラクル 2
三菱商事	3	日本貿易振興機構(JETRO) 2
リクルート	3	日本郵船 2
あいおいニッセイ同和損害保険	2	パナソニック 2
旭化成	2	日立製作所 2
アビームコンサルティング	2	ブリヂストン 2
アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社)	2	丸紅 2
伊藤忠商事	2	三井住友銀行 2
インテージ	2	三菱重工 2
エイチ・アイ・エス	2	三菱電機 2
A.P.モラー・マースク・AS	2	リコー 2
SMBC日興証券	2	自由学園 2
LVMH モエ ヘネシー・ルイ ヴィトン	2	川崎市役所 2
キヤノン	2	東京都 2
グーグル	2	防衛省・自衛隊 2

■支援体制と学生の満足度

就職相談グループが支援をしている中で最も大切にしていることは、就職率の高さという物差しではなく、学生一人一人の自主性を尊重し、納得した進路決定ができるよう、そのプロセスにおける有効な情報提供、多種多様なニーズにあった適切な支援を実践していくことである。

本学では、全学年を対象とした「キャリア形成支援」(表4)と主に就職活動生を対象とした「就職活動支援」(表5)の2つの切り口から、総合的な進路支援に取り組み、対策・ノウハウを教えるのではなく、学生が正しい情報を得、その上で主体的に行動するためのヒントを提供することに主眼を置いている。

そのため、個人支援も重要視してお

り、就職登録者全員との個別面談、随時実施の予約制個別相談、求人や企業情報を掲載した就職メールマガジンの配信等、少人数教育ならではの、きめ細やかな支援を行っている。

また、学業を最優先し、学期期間中は授業の行われないコンボケーション・アワー(火曜日13時50分から15時)を中心に行事を開催するほか、第2学期終

了後の学期間休みを最大限に活用し、PLACEMENT WEEK(学内合同企業説明会)を実施、集中して就職意識を高める機会としている。

そのような中、学生は進路決定の過程において、リベラルアーツ的視点と自分にとって必要な情報を得、選択を行い、満足度の高い進路先に辿り着いていると言える。

卒業生の皆様へ

本学では2005年の個人情報保護法施行を機に「キャリア・サポーターズ」として、同窓生の皆様に情報提供をお願いしましたところ、これまでに3,000名の皆様からご登録をいただき、さまざまな行事やセミナー、OB・OG訪問等ご協力をいただいております。この場をお借りして御礼申し上げます。学生の進路決定に際し、引き続きご指導くださいますようお願い申し上げます。

登録・変更のご連絡は、就職相談グループ
(E-MAIL: placement-office@icu.ac.jp)まで。

表3 2011年度教養学部上位進学先

	(名)
東京大学大学院	28
一橋大学大学院	13
国際基督教大学大学院	9
京都大学大学院	5
名古屋大学大学院	5
早稲田大学大学院	4
慶應義塾大学大学院	3
北海道大学大学院	3
上智大学大学院	2
筑波大学大学院	2
東京学芸大学大学院	2
オックスフォード大学	2
ブリストル大学	2

表4 2011年度キャリア形成支援行事(全学年対象)

4月	1,2年生のためのキャリアガイダンス～今から自分の進路について向き合っていくために
5月	『国際機関で働くには』セミナー
10月	公務員セミナー
2月	教員志望者対象セミナー

★上記のほかに、「キャリア・ナビ」と題して社会人の卒業生をキャンパスに招き、働く意義や仕事内容について理解を深めるための行事も毎年4月に開催していますが、2011年度は震災の影響のため実施していません。

表5 2011年度就職活動支援行事(就職活動生対象)

5月	第1回就職ガイダンス『就職活動の流れと就職戦線』／第2回就職ガイダンス『夏休みの過ごし方とインターンシップ』※
6月	第3回就職ガイダンス『留学帰国者向け就職ガイダンス』／TOEIC団体受験※
9月	第4回就職ガイダンス／就職登録／自己分析セミナー／ビジネスマナーとヒューマンスキル／各種就職関連模試、テストの実施
10月	就職相談グループによる就活質問会
11月	内定者による就職活動体験談報告会／内定者による就活質問会／PLACEMENT WEEK★／TOEIC団体受験※
12月	就活モチベーション・セミナー
1月	就職登録者全員対象の個別面談

★PLACEMENT WEEKは、秋休みを利用して、さまざまなセミナー、講演を実施し、学生が集中的に効率よく就職の意識を高める週間。

[主たるプログラム]

学内合同企業説明会(参加企業数80社)、公務員合同セミナー※、就職情報社担当者講演、内定者による就職相談会、卒業生による就職相談会(同窓会と共催)

※就職活動支援の一環として位置づけているが、キャリア形成の意味も含まれるため全学年の学生にも開放している。

Placement for CLA Graduates in 2011

Expectations remained high for ICU students with the advent of global recruiting

Placement Group
Student Services Division

ICUの学びや対話によって 培われた力を多くの企業から 評価していただいています

学生サービス部 就職相談グループ長
篠田 薫



ICUのリベラルアーツは「行動するリベラルアーツ」ともいいます。文理を問わず、さまざまな学問を探求的に学び、卒業研究を通して統合します。このような教室での学びや教室外でのさまざまな活動を通して、異なる価値観、文化、慣習を持つ他者と触れ合うことで、地球市民としてどこでも活躍できる人材に成長します。

具体的には、主体性、論理的思考力、考え抜く力、異文化理解、多言語によるコミュニケーション能力などの点で、企業の皆様から高くご評価いただいています。就職相談グループでは年間400社強の企業の皆様とお会いし、本学学生への期待や卒業生の活躍ぶりをうかがっています。

とりわけグローバル人材を必要とする企業の皆様からは、学内での対話や学び、海外生活経験

で培われたコミュニケーション能力を、即戦力としての語学力だけではなく、現地での慣習を経験しているからこそその適応力として期待されています。

ICUの学びと働くことのつながりについて語った卒業生は、専門性を活かしながらも業務遂行のプラスアルファの部分にICUでの学びが活きていることを実感すると語っていました。それを、ある人はヴィンテージワインのように、またある人は漢方薬のように効いてくると表現していたのが印象的でした。

末永くこのような社会の皆様からのご期待に応え、またICUで学ぶ学生一人一人が満足し納得できる進路選択に取り組めるよう、毎日の支援に携わって参ります。

Qualities Cultivated Through ICU Learning and Dialogue Highly Regarded by Corporations

Manager, Placement Group
Kaoru Shinoda

The liberal arts of ICU may be considered "dynamic liberal arts". Without making a distinction between the humanities and sciences, students learn various disciplines using their inquisitive minds, and integrate those disciplines in their senior thesis research.

ICU students are welcomed for independence, logical thinking, the ability to think things through, cross-cultural understanding, and the ability to communicate bilingually. The Placement Group meets with more than 400 corporations to discover the expectations for ICU students and achievements of the graduates.

Corporations stressing global talents place high expectations on ICU graduates not just for work-ready language skills, but also for communication skills that resulted through on-campus dialogue and learning, and through overseas experiences.

Chart 1 Placement of CLA Graduates AY 2011

(unit: people)

	TOTAL		
	M	F	T
EMPLOYMENT	123	306	429
Agriculture, Forestry, Fishery & Mining	1	0	1
Construction	0	1	1
Manufacturing Industries	32	62	94
Public Utilities	1	1	2
Transportation and Communication	17	22	39
Wholesale and Retail	8	39	47
Banking and Insurance	13	30	43
Real Estate	0	2	2
Educational Institutions	7	21	28
Mass Communication Industries	6	9	15
Service Institutions	28	95	123
Nonprofit Enterprise	3	9	12
Civil Service	6	8	14
Other Employment	1	7	8
EMPLOYMENT (PART-TIME)	8	11	19
TO ADVANCED STUDIES	50	80	130
[Graduate School]	47	60	107
Graduate School in Japan	42	48	90
Graduate School Overseas	5	12	17
[University]	2	7	9
University in Japan	2	7	9
University Overseas	0	0	0
[Other Schools]	1	13	14
OTHERS*	34	53	87
Total Number of Responses	215	450	665

*"Others" includes seeking jobs and preparing for graduate schools, license exams, or waiting for the application results of graduate schools overseas, etc.
Total Number of Responses 665/Total Number of Graduates 691

Chart 2 Career Choices of ICU Students in 2011 <Corporations/Organizations>

(unit: people)

Anderson, Mori & Tomotsune	5	KDDI Corporation	2
The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ, Ltd.	5	Goldman Sachs Group, Inc	2
Works Applications Co., Ltd.	5	International Development Center of Japan	2
All Nippon Airways Co., Ltd.	4	Shimada Syoji Co., Ltd.	2
NHK	4	Jupiter Telecommunications Co., Ltd.	2
Rakuten	4	Ernst & Young ShinNihon LLC	2
Intelligence, Ltd.	3	Daiwa Securities Co. Ltd.	2
LTS, Inc.	3	DeNA Co., Ltd.	2
Shinsei Bank, Limited	3	Imperial Hotel, Ltd.	2
JTB Corp	3	TOTO LTD.	2
Deloitte Touche Tohmatsu (Japan Group)	3	Trend Micro Incorporated	2
Fast Retailing Co.	3	IBM Japan	2
Mizuho Financial Group	3	Oracle Corporation Japan	2
Mitsubishi Corp.	3	JETRO	2
Recruit Co., Ltd.	3	Nippon Yusen Kabushiki Kaisha (NYK LINE)	2
Aioi Nissay Dowa Insurance Co., Ltd.	2	Panasonic Corporation	2
Asahi Kasei Corporation	2	Hitachi Ltd.	2
ABeam Consulting Ltd.	2	Bridgestone Corporation	2
Aflac	2	Marubeni Corporation	2
Itochu Corporation	2	Mitsui Sumitomo Banking Corporation	2
Intage Inc.	2	Mitsubishi Heavy Industries, Ltd.	2
H.I.S.Co., Ltd.	2	Mitsubishi Electric Co.	2
A.P. Moller - Maersk A/S	2	Ricoh Company, Ltd.	2
SMBC Nikko Securities Inc.	2	JIYUGAKUEN	2
LVMH Group	2	Kawasaki City	2
Canon Inc.	2	Tokyo Metropolitan Government	2
Google Inc.	2	Ministry of Defense	2

■ Overview of the 2011 Placement

Of the 665 students who answered our survey in 2011 (from a graduating class of 691), 429 secured jobs (64.5%) and 130 (19.5%) went on to graduate schools (see Chart 1). The survey was made to graduating students of June, 2011 and March, 2012, by urging students to submit questionnaires on campus, and by conducting a telephone poll to those who failed to do so.

Looking back on the 2011 placement, the Great East Japan Earthquake had considerable influence. While some corporations proceeded with hiring as scheduled, others postponed screening for 2 months. This was tormenting for some students who found it hard to remain motivated, but it also provided an opportunity to reconsider their career paths in the face of restoration phase Japan will be experiencing for the next few years. A longer screening season led to increased opportunities for the students returning from overseas, but brought about difficulties for the June graduating students who had to tackle the final semester and the screening process simultaneously. With the advent of global recruiting, expectations remained high for ICU students as a workforce that could excel on a world scale.

Among those who sought employment, 91.9% secured employment as normal. As seen on Chart 1, service institutions hired the highest number, 123 students (28.7% of those who secured jobs),

Chart 3 Career Choices of ICU Students in 2011 <Graduate Schools>

(unit: people)	
University of Tokyo	28
Hitotsubashi University	13
International Christian University	9
Kyoto University	5
Nagoya University	5
Waseda University	4
Keio University	3
Hokkaido University	3
Sophia University	2
University of Tsukuba	2
Tokyo Gakugei University	2
University of Oxford	2
University of Bristol	2

followed by 94 students by manufacturing (21.9%), 47 by the wholesale and retail trade (11.0%), 43 by banking and insurance (10.0%). As 'Career Choices of ICU Students in 2011 <Corporation/Organizations>' (Chart 2) indicates, students' choices cover a wide range.

The percentage of ICU students going on to graduate school was 19.5% which exceeds the national average of 12.8% according to the 2011 Survey by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Among those going on to graduate school (see Chart 3), the highest number entered The University of Tokyo (28 students), followed by Hitotsubashi University (13) and ICU (9). Despite the change in ranking order, the result remains much the same for the last few years.

To Alumni

We asked alumni to register as career supporters to help those who are coming after them. We are deeply obliged to them for cooperating at our events and seminars, as well as receiving students at their workplace.

To register or make changes in your registration, contact the Placement Group: placement-office@icu.ac.jp

■ Support System and Students' Satisfaction

The Placement Group put more importance on providing suitable assistance customized to each student's needs to reach satisfying decisions, rather than the percentage of students who acquire jobs.

Events and meetings were held as 'Job Seekers' Support Events' (Chart 5) provided for job-seekers, and 'Career Formation Support Events' (Chart 4) targeted for all students. The Group offered meticulous support by providing accurate information and advice on how to make independent decisions. Therefore, support for individuals took the form of one-on-one consultations for all registered job seekers and an e-Newsletter for job hunters. Taking advantage of the small number of students, attention was paid on a personalized basis.

Students employed the liberal arts perspective and collected information, made choices, and reached satisfying decisions.

Chart 4 2011 Career Formation Support Events (for all students)

April	Career Guidance for Freshman and Sophomore: "Facing Your Future Career from Now"
May	Seminar: "How to become an International Civil Servant"
October	Civil Servant Seminar
February	Teacher Seminar

★ Other than listed above, we annually hold the "Career Navi Sessions" in April which provide students opportunities to deepen their understanding in their career choices through talking with alumni. Unfortunately, due to the aftermath of the Great East Japan Earthquake, it was cancelled in 2011.

Chart 5 2011 Job Seekers' Support Events

May	First Job-hunt Guidance "Process of Job-hunt and Competition for Employment"/ Second Job-hunt Guidance "How to Spend the Summer and Internship"
June	Third Job-hunt Guidance "Job-hunt Guidance for Students Returning from Exchange Programs"/ TOEIC Exam*
September	Fourth Job-hunt Guidance/ Job-hunt Registration/ Self Analysis Seminar/ Business Manners and Human Skills/ Mock Exams for Job-hunting
October	Placement Group Q&A Meeting
November	Meeting with those who have informal contracts/ Consultation with students who have secured informal contracts/ PLACEMENT WEEK★/ TOEIC Exam*
December	Job-hunting Motivation Seminar
January	Individual Consultation for All Registered Job Seekers

★ PLACEMENT WEEK refers to a week during autumn break when seminars and lectures are held for job-seeking students. Major events held are the ICU Job-Fair (80 participating companies), joint civil servant fair*, consultation with those who have secured informal contracts, and alumni job-hunt consultation meeting (co-organized by the Alumni Association).

*Students can attend regardless of their year, as it offers an opportunity to think about future careers.

第1期 ICU Peace Bell Scholar 報告会 開催

First ICU Peace Bell Scholars Review Meeting

春季卒業式が行われた3月22日、東ヶ崎潔記念ダイアログハウス・国際会議室で、「ICU Peace Bell Scholar 報告会」が開催されました。

4年前の春、新しく設けられた「ICU Peace Bell 奨学金」を授与され入学した第1期スカラー（奨学生）12名のうち10名が、この日ICUを卒業しました（1名は母国で兵役服務中。1名は大学院進学のため6月卒業を予定）。

報告会は、スカラー全員の紹介で開会。続いて、スカラーを代表して坪木曜一郎さんと芦田加奈さんが謝辞を述べました。坪木さんは、「テニス部と学問の両立で困難に直面したとき、多くの方の期待を思い出し、モチベーションを高めました。社会で役割を果たし、自分たちがICU生を支えることができれば、最大の恩返しだと思います」、芦田さんは「勉学と課外活動に走り続けた4年間は、宝物です。さまざまな場所で奉仕の機会を与えられ、国境を越えたよき友を得ました。卒業後は、『絶対になることはない』と思っていたはずの、英語の教師になります」と話しました。

その後、ICU Peace Bell 奨学金立ち上げの貢献者である茅野友子さん（CLA2期、ID58）と土屋隆一さん（CLA7期、ID63）が、祝辞を述べました。茅野さんは、「ICUで得た教え、友人、教会、自然がどれだけ支えになるか、これから分かるはず。この輪に入りネットワークを強めてください」と呼び掛けました。また、土屋さんは「美しいキャンパスで存分に教育を受けることができたのは、ICU 献学のために日米の市民が支援してくれたおかげです。将来、皆さんがここに立ち、私と同じようなスピーチをしてくださることを願っています」と話しました。

On March 22, the day of spring commencement, the ICU Peace Bell Scholars Review Meeting was held at the International Conference Room in Kiyoshi Togasaki Memorial Dialogue House. The ICU Peace Bell Scholarship was newly established four years ago in the spring, and ten of its first twelve scholars graduated on this day. (One scholar is currently serving in the military, and the other will graduate in June before continuing on to graduate school.)

The Review Meeting started by introducing each scholar, and Yoichiro Tsuboki and Kana Ashida expressed their gratitude on behalf of the rest of the scholars. Tsuboki said, "When I was under pressure to balance school work and tennis club activities, I would boost my morale by recalling all the hopes pinned on me. If I could play a part in society and give support to ICU students, it would be my way of repayment." Ashida said, "These four years that I immersed myself in academic works and after school activities are very dear to me. I was given many opportunities to service the community in various places, and was fortunate to have gained friendship beyond national boundaries. I will be an English teacher which I had once thought I would never become."

Mrs. Tomoko Chino (CLA2nd, ID'58) and Mr. Ryuichi Tsuchiya (CLA7th, ID'63) who played key roles in establishing the ICU Peace Bell Scholarship congratulated the graduates. Mrs. Chino said, "You will come to know how much support you get from what you learned and friends gained at ICU, the church and the nature. It is my wish that you join this circle and strengthen your network." Mr. Tsuchiya said, "To have been able to learn to your heart's content on this beautiful campus, we owe it to the people of Japan and the U.S. who made contributions to found ICU. I hope you will someday stand here and give a speech like mine."



写真後列左から、長谷川、寺田、坪木、竹内、君島、伊藤 Back row from left: Hasegawa, Terada, Tsuboki, Takeuchi, Kimishima, Ito
写真前列左から、芦田、牛島、今井、長田、佐藤 Front row from left: Ashida, Ushijima, Imai, Osada, Sato

(敬称略)

- ①専攻
- ②卒論タイトル
- ①Majors
- ②Title of Senior Thesis

長谷川 ゆみ

- ①文学
- ②江國香織著『ウエハースの椅子』における非現実感の表現

Yumi Hasegawa

- ①Literature
- ②The Expression of Unreality in Kaori Ekuni's Novel, "Wafers Chair"

寺田 雅美

- ①心理学
- ②瘦身願望が摂食場面における選択行動に及ぼす影響

Masami Terada

- ①Psychology
- ②The Effect of Slimming Desire on Food Choice Behavior

坪木 曜一郎

- ①物理学
- ②ハロー形成時における銀河初期化学進化の確率的モデル化

Yoichiro Tsuboki

- ①Physics
- ②Stochastic Modelling of Early Galactic Chemical Evolution during Halo Formation

竹内 玲

- ①経済学
- ②2020年夏季東京オリンピック招致の是非
～収支均衡原則の観点から～

Rei Takeuchi

- ①Economics
- ②Cost Benefit Analysis of Inviting of the 2020 Olympic Games to Tokyo Based on the Balanced Budget Approach

君島 梨央

- ①言語教育
- ②在外日本人の母語継承教育に対する意識の考察:オーストラリア・ブリスベンの事例

Rian Kimishima

- ①Language Education
- ②Overseas Japanese' Attitudes towards Their Children's Heritage Language Education: A Case Study of Brisbane, Australia

伊藤 理恵子

- ①文学、政治学 (メジャー、マイナー)
- ②(6月卒業予定)

Reiko Ito

- ①Literature, Politics (Major, Minor)
- ②(Graduating in June)

芦田 加奈

- ①比較教育、言語教育 (ダブルメジャー)
- ②「癒し」と「幸福の実現」に繋がる性教育

Kana Ashida

- ①Comparative Education, Language Education (Double Major)
- ②Arriving at Healing and Happiness through a Holistic Approach to Sex Education

牛島 彩華

- ①心理学、生物学 (メジャー、マイナー)
- ②自己イメージとスポーツのイメージの一致度と達成動機がスポーツに対する観戦意欲と好感に与える影響

Ayaka Ushijima

- ①Psychology, Biology (Major, Minor)
- ②The Effects of Self Image and Sport Image Congruence and Achievement Motive on Motivation and Favorable Impression for Spectator Sports

今井 美佐

- ①国際関係学、アジア研究 (メジャー、マイナー)
- ②戸籍制度は、三農、農民工、貧富の格差にどのような影響を与えているのか:北京における農民工へのインタビュー調査を通して

Misa Imai

- ①International Relations, Asian Studies (Major, Minor)
- ②What Kind of Influence Does Family Register System Affect to Three Rural, Economic Nomad and Wealth Gap: Through the Interview Research from the Economic Nomad in Beijing

長田 彩湖

- ①文学、経営学 (メジャー、マイナー)
- ②シェイクスピア喜劇における女性の表象

Ayako Osada

- ①Literature, Business (Major, Minor)
- ②Representation of Women in Shakespeare Comedy

佐藤 渚

- ①物理学
- ②平面金属/絶縁体/真空型素子添加ダイヤモンド電子放出源について

Nagisa Sato

- ①Physics
- ②Flat Metal-Insulator-Vacuum Type Nitrogen Doped Diamond Cathode

「これからは卒業生が ICUを支える番だと思う」

特別対談

西潟悠紀子さん × 茅野徹郎さん

聞き手：学長 日比谷潤子



昨年、ICUは1期生(ID57)の西潟眞澄さんのご遺族から多額のご寄付をいただき、「西潟眞澄奨学金」を設立しました。今回、ご夫人の西潟悠紀子さんと、同じく1期生で、ICUの募金組織「Friends of ICU」を立ち上げた元大学法人財務理事・茅野徹郎さんに、ご寄付に込められた故西潟眞澄さんの思いや献学当時の思い出などを伺いました。

1期生が送った 素晴らしいキャンパスライフ

日比谷 今日はキャンパスの桜並木が満開でした。この桜も、1952年に茅野さんたち1期生の方々が植えてくださったのだと、感慨深くその下を通ってまいりました。52年に語学研修所(Language Institute: LI)が開所し、西潟さんと茅野さんは1期生としてLIに入所されたのですが、そのいきさつをお聞かせください。

茅野 当時、大学建設のための募金運動があり、私の通っていた山梨県の教会にもポスターが貼られていました。いつできるかと心待ちにしていたのですが、2年経ってもできませんでした。やっと開学したと思ったら、大学ではなくて語学研修所だったわけです。70～80人の募集に対して3,000人も応募したそうです。当時の若者たちはそれほどICUに期待していたのでしょう。合格の報せを聞いた時、私は宝くじに当たったような気持ちでした。

西潟 ICUに入学したいいきさつについては、本人からはっ



日比谷潤子学長

きりと聞いたことはありませんでした。しかし、新しい大学ということに期待してICUを志望したのでしょう。英語や国際的なテーマを勉強したいという気持ちを持っていたのだと思います。

茅野 今思えば、LIの教育は生きた教育でした。国際人としての基礎を学ぶことができました。LIの授業で思い出深いのは、発音を担当されていたゲアハード先生です。日本的な発音ではいかんということで、鏡を見ながらとても細かく指導されました。しかし、それが後になってとても役に立ちました。他にPublic Speakingの授業もありました。湯浅八郎学長は常に「相手の顔を見て話すこと。顔を見ないとやましいことがあると思われる」など、初歩から本当によく教えてくださいました。

西潟 良い先生に恵まれて、お仲間にも恵まれて。毎日の勉強は新しいことばかりで、とても楽しかったとよく話しておりました。

茅野 大学が始まってからは、なんといってもキャンパスライフが素晴らしかった。キャンパスに住んでいる先生方との交流もあり、寮では学生同士のコミュニケーションもある。さらに教会もある。真のキャンパスライフを送れるのは、日本ではICUだけじゃないでしょうか。寮の生活は毎日が切磋琢磨でカルチャーショックも受ける。これが大切なことなんです。カレッジというのはそもそも寮ですからね。ケンブリッジにしても、オックスフォードにしても。寮は重要だと思います。



西潟悠紀子さん

日比谷 おかげさまで、ICUには新しい寮が三つできましたので、全学生のほぼ25%が寮に入れることになっています。入寮を希望する学生は今もとても多いです。



茅野徹郎さん

さて、卒業後は、西潟さんも茅野さんも国際ビジネスの分野で活躍されました。ICUでの学びはどのように役立ったとお考えですか。

茅野 私は商社に4年勤めた後、海外に進出し始めたホンダに入社しました。64年から7年間ヨーロッパで働き、日本に戻った後、79年に今度はアメリカへ行きました。まだ海外で働く日本人が少なかった時代です。ICUで学んだことの中で役に立ったのは英語、そしてリベラルアーツの教育です。海外では、美術などのベーシックな知識が会話の中でとても大切なのです。専門教育に重点を置きがちな日本の大学に対して、ICUはそのアンチテーゼとしてできたリベラルアーツ大学です。専門はロースクールやメディカルスクールなど専門大学院で学べば良い。ICUは世の中に付和雷同せずに、これからも国際的なエリートを育てていってほしいと思います。

西潟 西潟は卒業後、日立製作所に就職しました。その後、フルブライトの奨学金により、コロンビア大学のビジネススクールへ行きました。アメリカでは勉強で苦労したようですが、ICUで学んだことが常にベースになっていたと、話しておりました。帰国後はアメリカ系の企業で働いておりました。

受けた恩恵を次の世代へ 遺贈に込められた思い

日比谷 このたび、西潟さんにはICUへご寄付をいただきまして、ありがとうございます。今回のご寄付について、どのような経緯がおありだったのかお聞かせください。

西潟 西潟自身、教育というものが非常に大事だということとは、身にしみて感じていました。ICUで勉強できたことは幸せだっただろうと思います。あの時代は、国としても大変貧しい時代でしたから。彼の家もそれほど裕福ではなかったなので、卒業後にまた海外で勉強するのはなかなか大変なことでした。しかし、幸いフルブライトの試験に合格してコロンビア大学へ行くことができました。アメリカにいた時には、経済的にいろいろサポートしてくださった方、クリスマスやイースターなどに、ご自宅に招いて文化を体験させてくださった方もいらっしゃいました。とても親切にしていたのだそうです。そういう方々に感謝の気持ちを示したいけれども、ほとんどの方がもう亡くなられてしまいました。優秀で勉強したくても金銭的な問題でそれ以上高い教育が受けられないという人たちをサポートすることができたら、お世話になった方たちの恩に報いることになるのではないかと。そのようなことを、よく二人で話しておりました。

日比谷 今回のご寄付により、東南アジアからの留学生を対象にした「西潟眞澄奨学金」を設立させていただきました。このいきさつを伺わせてください。

西潟 私は品川にあった難民を支援する国際救援センターで、中学生に勉強を教えていたことがありまして、インドシナ難民の子どもたちが家に遊びに来たりしておりました。とても一生懸命で良い子たちでした。どちらかというと、アメリカやヨーロッパの学生には機会が与えられているようですが、東南アジアの学生にはまだ限られているようです。できるならば、本当に学びを切望している方々をサポートしてあげたいという思いがありました。

茅野 我々の時代は、香港から毎年5人ほど留学生が来ていました。当時アジアからの留学生は少なかったので良い

意味で刺激になりました。国際といってもアメリカ、ヨーロッパだけではないですからね。さまざまな地域に目を向けることは大事なことだと思います。

日比谷 ICUの留学生には4年間通って学士号を取得する学生と、1年間の交換留学生として学ぶ学生がいます。私は4年間で学士号を取る学生をもっと増やしたいと思っています。それも、茅野さんがおっしゃるように、できるだけいろいろな地域の人をと思っています。今回のご寄付によって、東南アジア地域での学生募集活動を活発にする、非常によいきっかけをいただいたと思っています。

茅野 西潟君からのご厚意は、ICUへの寄付のブレイクスルーになると思います。我々も西潟君に続かなければいかんと、卒業生全員の愛校心に訴えかける大きなインパクトになるでしょう。そもそも、ICUは寄付により献学された大学です。我々が入学したときは卒業生はいなかったのですが、学費で賄いきれない教育費はすべて寄付で支えられていました。でも、今や卒業生は2万人もいるわけです。これからは卒業生が大学を支えていかななくてははいけません。特に遺贈による寄付にもっと関心を持ってほしいですね。ぜひ、卒業生全員にこのことを伝えていただきたいです。

日比谷 私たち大学側も、さまざまな機会をとらえて、卒業生の方々に今大学は何を目指しているのか、今後どのようなプログラムを考えているかをご紹介してまいります。それに対して、皆様から、ご支援をいただけるようであれば、学生と教育のために大切にに使わせていただきたいと思います。

※「遺贈」についての詳細は38ページをご覧ください。



今回の特別対談は、2012年4月13日に国際文化会館で行われました。

“Think What Graduates Can Do for ICU”

Special Dialogue: Mrs. Yukiko Nishikata

Mr. Tetsuo Chino

Interviewer: President Junko Hibiya

Last year, ICU received a substantial donation from the family of the late Mr. Masumi Nishikata (ID'57: 1st class to graduate from ICU) and established a new scholarship. Along with Mrs. Yukiko Nishikata, Mr. Tetsuo Chino, founder of ICU benefactors' organization “Friends of ICU”, also of 1st graduating class, had a special talk about the memories of ICU, and Mr. Nishikata's thoughts behind the contributions.



From right: Mr. Tetsuo Chino, Mrs. Yukiko Nishikata, President Junko Hibiya
(This interview was taken on April 13, 2012, at International House of Japan)

Wonderful Days 1st Graduating Class Spent at ICU

Hibiya: Cherry blossoms on the campus were in full bloom today, and they made me think of how those trees were planted by Mr. Chino and other students of 1st graduating class. Language Institute: LI was initially established in 1952, and Mr. Nishikata and Mr. Chino were among its first students. Could you tell me how you came to study at ICU?

Chino: At a church in Yamanashi that I used to go to, I saw a poster raising funds for building a new university. After waiting for two years for it to start, I applied and was really excited when I was accepted. It felt like I had won lottery because I heard that over three thousand applicants had applied for seventy to eighty slots, which showed the expectations people had for the school.

Nishikata: Although I never had the chance to hear why my husband chose ICU, I imagine he had high hopes for the new university. I think he wanted to study English and other international subjects.

Chino: Looking back, what we learned at LI was pragmatic and basic knowledge expected of an international person. I remember a pronunciation class taught by Dr. Gerhard. He had us work hard with mirrors so that we could speak without Japanese accents. I also remember a Public Speaking class. President Hachiro Yuasa always told us to look into the eyes when talking; otherwise people might

think we had something to hide. Such fundamentals were taught and later paid off well in our lives.

Nishikata: My husband used to tell me he really enjoyed the time at ICU, learning new things every day in the company of good teachers and friends.

Passing on the Goodwill to Next Generations Hopes Represented by the Testamentary Bequest

Hibiya: We are very grateful for the kindness Mr. & Mrs. Nishikata showed us through the donation to ICU. Could you tell me how it came about?

Nishikata: My husband understood the importance of education through his own experience. It must have been a blessing to have studied at ICU. Japan was still very poor back then. He was fortunate, however, in receiving a Fulbright scholarship to go to Columbia University. When he was in the U.S., there were so many who gave him financial support, or provided him with cultural experiences when they invited him over for Christmas and Easter. They were all very kind to him. As much as he wanted to express his gratitude to them, most had already passed away. If he could give assistance to the young generations unable to continue onto higher education due to economic reasons, would that not be a form of repayment to those who supported him in his younger days? He and I discussed such possibilities.

Hibiya: Thanks to this donation, ICU established a new scholarship for overseas students from Southeast Asia. What is the reason behind this?

Nishikata: I was under the impression that more opportunities are given to western students, while chances are still limited to those who come from Southeast Asia. It was our wish to give assistance to those who truly aspire to learn.

Chino: The donation to ICU from Mr. & Mrs. Nishikata is a groundbreaking example. Knowledge of this donation would have a great impact on all graduates as it shows love for their Alma Mater. It may also foster other graduates to follow their lead as ICU was originally started with donations. As there were no graduates when we entered ICU, all of the education related expenses not covered by our tuition were covered by donations. Now that we have twenty thousand graduates able to give support, the time has come for us graduates to uphold ICU. I hope that this goodwill will be known to all graduates so that they have respect for and take an interest in donating.

Hibiya: We would also utilize every opportunity to let the graduates know what ICU's current goals and future programs are. Considerate support and contributions from the graduates would be highly valued and carefully used for the students and education.

「大変な時代にこそ、文学の良さが見なおされる」

岩切 正一郎 教授
文学メジャー

“Literature Reexamined in Difficult Times”

Professor Shoichiro Iwakiri
Literature



——先生の研究分野について教えてください

私の専門はフランス文学です。特に、19世紀の詩人ボードレールを中心に、フランスの19～20世紀の近現代詩を研究しています。詩的言語がどういうふう言語として使われているか。それが世界にどういうふう意味をつくりだしているのか、といった観点から研究しています。

また、社会的な活動として、演劇の翻訳にもたずさわっています。昨年4、5月に新国立劇場で上演されたサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』も翻訳を担当しました。主演した橋爪功さんが紀伊國屋演劇賞を受賞されました。廃墟の中で、ただゴドーを待つという作品の世界が、これは偶然なのですが、震災後の社会と一致するところもあり、当日券に朝から行列ができるほどの話題作となりました。

——なぜ文学の世界に進もうと思われたのですか？

大学に入る前にもいろいろと本を読んではいましたが、専門にやろうとは思っていませんでした。哲学や文学などの分野

に進もうかなという漠然とした気持ちでした。そのうちに、いろいろな国の文学の中でも、フランス文学には特に面白いものがあると思いました。フランス文学の特徴の一つに心理小説というのがあります。人間の内面を分析しながら、見えない心の動きを見ていったりするものです。知的なものでは捉えきれないところを、感覚的な部分を上手に取り入れて、知的な解釈をしていく。知的か感覚かという、どちらか一方ではないので、二重の深みがあります。

文学なんて何の役に立つのかというふうに見られることもありますが、震災後、文学や芸術こそ人間が生きていく上でとても大事なものと結びついていることが再認識されているのではないのでしょうか。危機的状況に陥ったり、何かを喪失した状態の時にもっとも大切なこととして思い出すこと、そういう日ごろ見えないものを言語によって価値づけ掘いとしてゆくというのが、昔からの文学の営みなのです。

——ICU生についてどう思われますか？

ICU生は、小さいことでも疑問を持つと質問します。自分の意見を臆さずに言ってくれるので、そこから新しい見方も始まります。文学に一つの解釈というのはありえないので、いろいろな意見が出る方が良いのです。また、フランス文学専攻の人だけでなく、心理学や、歴史学、政治学などさまざまな専門の人たちが授業に出席しているので、それぞれが関心のあることから多面的にアプローチしてくれます。私もいろいろと学ぶことができます。

——Please tell us about the area of your study.

My field is in French Literature, especially modern poetry of the 19th to 20th century centering on the 19th century poet, Baudelaire. I research how the poetic language functions as language, and how it creates meanings in the actual world. I also engage in translation of theatrical works as part of social activities.

——What prompted you to go into the world of literature?

I had a vague inclination to go into the field of philosophy or literature, but I found French literature to be more attractive than the others. One of the aspects in French literature is the psychological novel. It portrays the invisible workings of the human mind while analyzing psychology. What intellect is not quite able to capture, psychological novels provide interpretations to them by artfully introducing sensibility. It is not a choice between intellect versus sensibility but the harmony of the two that makes French literature all the more intriguing. Some may wonder what use Literature has, but after the earthquake, Literature or Art is once again recognized as something deeply connected to the most significant things in life.

——What is your take on ICU students?

ICU students will ask a question no matter how trivial it may seem, and their frankness in expressing opinions often leads to new perspectives. Having input from various directions is good because there is no one single interpretation in Literature.

アカデミックプランニング・センター

Academic Planning Center

担当職員
Staff森川 園子 Sonoko Morikawa
大枝 さやか Sayaka Oeda全学生に開かれた
メジャーの総合相談窓口です

08年4月、ICUがメジャー制になったのを契機に、アカデミックプランニング・センターは開設されました。全学生に開かれた履修の総合的な窓口として、学生の個別相談にえています。

ICUでは、入学時に学生一人一人に専任教員アドバイザーが割り当てられます。学生たちは履修登録日に先生の研究室を訪れ、履修計画のアドバイスを得ます。教員アドバイザーは学生の成績をモニタリングし、推薦状を書いたり、卒論の指導などを行います。この教員によるアドバイジングを補完するのがアカデミックプランニング・センターです。

例えば、総合病院の窓口がアカデミックプランニング・センターのオフィスです。窓口だけで解決できることもありますが、専門医のアドバイスがあった方がよいという場合は、専門の先生方や部署を紹介することもあります。

履修の自由度が高いICUだから
アドバイジングも複数用意

履修の自由度が高く、選択している科目が一人一人異なっているというのがICUの特徴です。しかし、その分、自分自身の責任が求められるカリキュラムになっています。入学したばかりの学生に、いきなり自分たちで計画を立てなさいというのは難しいことです。

アカデミックプランニング・センターでは、「いろいろなメジャーがあってどれにしたら良いか」、「大学院に行こうか就職しようか」、「あれもこれもやりたいが4



年間で全部できるだろうか」といった相談を受けます。私たちは基本的に、学生の話をよく聞いて、何に興味があって、将来何がしたいのかということを引き出していきます。アドバイジングの中で選択肢を示すこともありますが、最終的に決定するのは学生自身です。あくまでも学生が主体的に、自発的に取り組んで、「プラン」して欲しいという思いを込めてセンターの名称にも「プランニング」と付けています。

また、アカデミックプランニング・センターには、学生の履修相談に應える「ピア・アドバイザー」もいます。ピア・アドバイザーとは相談者である学生と同じ目線を持った先輩、つまり学生アドバイザーのことです。アドバイジングに関するチャンネルが複数用意されているので、自分のニーズに合わせて学生が上手に活用してくれると良いと思います。アカデミックプランニング・センターは食堂のある東ヶ崎潔記念ダイアログハウス2階にあります。初めての場、場所が分かりづらいかもしれませんが、気軽に相談に来てもらえればと思います。

A Portal Open to All Students

Academic Planning Center was established with the start of the system of academic majors in April, 2008. The Center provides individual assistance to all students concerning academic planning.

A full-time faculty member is assigned as an advisor to every student at the time of matriculation. Students visit the advisor's office on the registration day, and receive advice on academic planning. The Academic Planning Center functions in conjunction with the Faculty Advisor system.

If compared to a general hospital, the information desk would be the office of Academic Planning Center. Some issues may be resolved at the desk, but others may call for a specialist. Such cases are referred to a faculty member or an office staff.

Advising Caters to ICU's Uniquely Flexible Academic Planning

"There are so many majors to choose from." "Do I want to go to Graduate school or go into business?"; these are the typical concerns expressed at the Center. Alternative ideas may be presented in the course of advising, but it is the student who makes the final decision. We stress that students 'plan' proactively on their own initiative; hence we call it the 'Planning' Center.

「ちょっとしたきっかけで 歴史はすごく身近になる」



星野 博美さん

作家

プロフィール

Hiromi Hoshino

1988年に教養学部卒業(CLA32期、ID88)。作家、写真家。
01年の『転がる香港に苔は生えない』で第32回大宅壮一ノン
フィクション賞受賞。近著、『コンニャク屋漂流記』では第63回
読売文学賞 随筆・紀行賞を受賞。

『コンニャク屋漂流記』で自らのファミリー・
ルーツをたどる壮大な旅を書き、今年2月に
第63回読売文学賞 随筆・紀行賞を受賞さ
れた作家の星野博美さん。ICUでの大学生
活や香港交換留学の思い出、そして今回の
受賞作品についてお話をお聞きしました。

多国籍なICUのキャンパスで 中国史を学ぶ

大学では中国史を勉強しました。どうして中国に興味を持ったかという、なかなか説明するのは難しいのですが、小さい時に横浜中華街によく連れて行ってもらって、食事でも中国と日本はこんなに違うんだなと幼心に思いました。ちょうど、中国で文化大革命が終わったというのをテレビの報道で見っていました。まだ10歳くらいだったので、よく分からないけれど、中国ですごいことがおきている、この国はなんだか面白そうだなと思っていました。

中国への興味がどんどん積み重なって、大学に入ったら中国のことを勉強したいと思って調べていたら、ICUには交換留学のシステムがあると分かりました。当時、交換留学のシステムがある大学はほとんどありませんでしたし、中国は個人で留学するのが難しかったので、じゃあ、香港でも良いかなって。軽い考えでした。でも、結果的には良かったと思います。数年前にICUの在學生に呼ばれて、お話ししたことがあるのですが、一時期、昔よりも留学する人が減ってしまったと聞きました。ICUに入学した人が外国に出たくないなんて「なぜだ!」って思います。若い人の中には、外国に行かなくなってきたいたい分かるという人がいますが、それは、単なる情報でしかなくて、自分の体験とは違うものです。自分の興味あることがあったら、まずは飛び込んでみることも大切だと思いますよ。

ICUには香港から留学してきている人たちも結構いました。そういう人たちとは中国語のクラスで知り合ったんです。当時、香港の人たちは普通話(北京語)ができなかったので、成績が悪かったんですよ。それで、中国語の先生に「君たちは考えが甘い、漢字を知っていると思って怠けている!」って、すごくおこられていました。日本人も外国人も同じ授業を受けて、先生も平等に接するというのがICUの良いところですね。入学したときは、学内の外国人といえどアメリカ人ばかりだと思っていました。でも、日本人と風貌が似ているので気づいていなかっただけで、アジアからの留学生もたくさんいることが後から分かりました。キャンパス内が多国籍なのはとても良かったと思います。

大学時代は真面目に授業に出ていました。ほとんど休むこともなく。でも、実は学校の明るさとか、ポジティブさになじめないところがありました。授業しか出ていなくて、大学の活動はほとんど何もしていないですね。でも、ICUは結構ほっとしてくれる学校ですね。生徒が変わってようが、浮いてようがかまわない。そういうところが良かったです。

ICUの交換留学で 香港の時代の変化を肌で感じた

84年にマーガレット・サッチャーと鄧小平が共同声明に署名して、97年7月1日に香港は中国に返還されることが発表されました。私がICUの交換留学で香港に行った86年は、返還の10年前で香港の人たちの間で不安がピークに達している時でした。大学生たちの間でも「これからいったいどうなるのか、とにかく海外に移住したい、外国人と結婚でもしてパスポートを手に入れようか」といった、一種のパニック状態になっていました。もし、日本で返還の報道を見ていただけたら、ちょっとわからない感覚だったと思います。でも、時代のおかげで私は肌で感じることができました。それが、10年後の返還も自分の目で見に行きたいと思った大きな原因でした。

卒業後、就職しましたが辞めて、カメラマンのアシスタントになりました。せっかく中国に行くのだからと、写真の基礎だけ教えてもらって撮り始めたのです。そして、香港返還の97年7月1日を境に、96年から98年まで香港に滞在しました。返還前の一年はすごかったです。カウントダウンのお祭り騒ぎと不安な現実とは直面したくない気持ちの間で、揺れ動いている感じでした。テレビでは、「今日は植民地最後の〇〇が行われました」「今日は〇〇が閉鎖されました」、「〇〇に住んでいたイギリス人が帰国しました」という報道が流れ、毎日が異様な興奮に包まれていました。

当時の香港国際空港は啓徳空港と言って、市街地の真上を飛行機が通って着陸するような、すごい空港でした。飛行機が降下してくる真下あたりの町に私は住んでいました。古い建物が密集していて、火葬場が近くにあるから風水も悪い。再開発もできないので家賃はずっと据え置きという

ような地域でした。道を歩いていると10分に1回ぐらいジャンボ機が飛んできて、洗濯物をなぎ倒すぐらい低いところを横切っていく。その大きさと言ったら、ものすごかったです。たぶん、見たことのない人には想像もつかないでしょう。

祖父母の昔話から 自分のルーツに興味を持つ

『コンニャク屋漂流記』は自分のルーツについて書いています。ルーツに興味を持ったのは、いつも祖父母の昔話を聞いていたからだと思います。実家は町工場で、両親が忙しく働いている昼間、世話をしてくれたのが祖父母でした。その時に聞いた昔話を折々に思い出しては、あれはどのようなことだったのかな?ちょっと調べてみようかなと。祖父母の話が一番身近な生きた歴史だったんです。たぶん、私は過去に興味があったから、専攻も歴史になったのかも知れません。

自分のルーツに興味を持っている人はたくさんいると思います。時間と根気をかけて戸籍やお墓を一つ一つたどっていけば、意外な発見があります。でも、生きた話と言うのは、生きた人から聞かないとダメです。記憶力の良いおばあさんが一人いれば、その人から100年分ぐらいの話が聞けます。私の場合は、話し好きで記憶力の良い長老が一人二人まだ健在だったというのが、とても幸運でした。

これは本にも書いたのですが、五反田に藤倉という軍需工場があって、そこに小林多喜二がいたということをたまたま知りました。それを知ったとたん、町の歩き方というか、品川区の見え方が変わりました。それまで、小林多喜二と言えば『蟹工船』、有名な作家だけれど自分とはまったく別の人という感覚しかありませんでした。でも、祖父と同じ時に小林がこの辺りを歩いていたのかと思うと、町が前とは違うように見えてくるんです。本当にちょっとしたきっかけで歴史を知れば、歴史がすごく身近になるということが、今回の本で最も言いたかったことなんです。

私からすると、徳川家康も今ではちょっとした知り合いみたいな感じです。家康のおかげで私の先祖が関東に移ってきたわけですから。今までは、時代劇を見ていても家康は嫌

いだっただんですが。歴史は、本を読んで勉強するだけではなく、なにか自分と接点を見つけて、自分にひきつけてくると、もっと面白くなると思います。

自分の過去を忘れないように 大学時代から日記を書く

今回の本を書くきっかけになったのは、祖父の書き残した手記でした。大量にあったわけでもなく、便せんにただつらつらと自分の楽しかった思い出だけ書いてありました。私はICU時代から日記を書き始めました。時々、大掃除などで昔の日記が出てくると、びっくりしますよ。大学生だから25年ぐらい前ですが、自分は物事を知っているようなことが書いてあるんです。日記がなければ、まるで大学時代から物事が分かっている、将来の進路もきちんと決めていたと、自分で自分の記憶をねつ造してしまったと思うんです。ああ、若いときはこんなにバカだったし、何も考えてなかったんだって、後から分かる方が大事だと思います。

学生時代に行った中国旅行でも、いろいろなことを書き留めていました。大事なのは値段で、どこからどこまでバスに乗っていくらだったとか、今日は春巻きを食べていくらだったとか。08年に『愚か者、中国をゆく』という、中国旅行の本を書きましたが、当時書き留めたものを基にしています。値段などのちょっとしたメモから、いろいろなことが思い出せるんです。

日記は今でも毎日書いています。よく感心されますが、日記を書かない人は自分の過去を自分で忘れてしまわないのだろうか、逆に私は不思議です。自分がその時思ったことは、自分にしか分からないのに、書いておかないと誰も憶えていてくれない。日記が続かない人は、たぶん立派な日記を書こうとするからだと思います。後から思い出さすきっかけに、出来事だけでも書き留めておけば良くて、その時の心情をながながと吐露する必要はないんです。みなさん、日記を書いたらいいのになと思います。



Small Things Help Us Feel Closer to History

Hiromi Hoshino, who won the 63rd Yomiuri Prize for Literature (Essay & Travelogue) for describing an epic journey in search of her roots in “Konnyaku-ya Hyoryuki” (Journal of Konjac monger), recalls her days at ICU and in Hong Kong where she spent a year as an exchange student, and talks about her award winning book.

Studied Chinese History in the International Environment of ICU

I studied Chinese history at ICU. I remember watching the news of China's Cultural Revolution coming to an end. As a ten year old, I didn't quite understand the significance, but I felt something exciting was happening in China, and it fascinated me.

As my interest in China grew stronger, I looked into which universities had good Chinese programs and discovered the ICU Study Abroad Program. Few universities had such educational exchange programs back then, and China being a difficult country to go to on my own, I settled on Hong Kong. Just like that, I decided which country to go to. In retrospect, my choice turned out well. Some young people may say they get enough information without going overseas, but that is just data and different from personal experience. It is important to dive into something if it truly interests you.



Profile

Hiromi Hoshino
(CLA32nd, ID'88)

Writer and Photographer, Hiromi Hoshino won the 32nd Oya Soichi Nonfiction Award for her work of 2001, “Korogaru Hong Kong ni Koke wa Haenai” (Rolling Hong Kong gathers no moss). Her recent work “Konnyaku-ya Hyoryuki” was awarded the 63rd Yomiuri Prize for Literature (Essay & Travelogue) in February, 2012.

There were several students from Hong Kong studying at ICU. I came to know them in Chinese language classes. Their grades were not so good because Hong Kong people did not use Mandarin back then. Our teacher would scold them and say, “You need to take this seriously. Just because you know Chinese characters does not mean you know the language!” I think one of the virtues of ICU is that Japanese and non-Japanese enroll in classes alike and that the teachers treat them equally.

ICU Educational Exchange: Felt the Changing Hong Kong Firsthand

In 1984, Margaret Thatcher and Deng Xiaoping signed the joint declaration to return Hong Kong to China on July 1, 1997. The year that I went to Hong Kong on the ICU Educational Exchange program was 1986, which was just ten years before the handover, and there was anxiety in the air among the people of Hong Kong. University students were almost in a state of panic, worrying what would become of them, hoping to relocate overseas at any rate, even contemplating getting married for passports. It was an atmosphere I would never have felt were I just watching the news on TV in Japan. I am grateful that I was able to get the firsthand glimpse of the passing of the era. This was the main motivation behind my going back to Hong Kong ten years later to see the handover with my own eyes.

After graduating ICU, I briefly worked at a corporation but later became an assistant to a photographer. I figured learning the

basics of photography would help me in recording this special moment of Hong Kong's history. I stayed in Hong Kong from 1996 to 1998, before and after the handover of July 1, 1997. The year before the handover was bizarre, as if entire region was wavering between the countdown celebrations and the unforeseeable future.

Anecdotes Told by Grandparents Stimulated My Interest in My Roots

“Konnyaku-ya Hyoryuki” is about my roots. I was intrigued by my origin probably because of the anecdotes my grandparents used to tell me. From time to time, I would recall one-upon-a-time stories they told me, and thought I would do a little research into how it all happened. Their stories were the most familiar living history books for me. Perhaps it was because of my attraction to the past that I chose History as my major at ICU.

As I mentioned in my book, Takiji Kobayashi, a famous author, worked at a munitions factory called Fujikura in Gotanda. Once I came upon that fact, the way I look at Shinagawa-ku changed. Until then, although I knew of him for his well-known novel “Kanikosen” (Crab-Canning Boat), Takiji Kobayashi was someone who lived in a different world. To think that he lived and walked on the same streets as my grandfather did, the town started to take on a totally different aspect. It is such little details about history that connects you to the past, and that is what I wanted to write about most in my book.

献学60周年記念イベント 「本館誕生70周年記念会」 を開催

本学アジア文化研究所は2011年12月10日、「本館誕生70周年記念会～12月8日をわすれないで～本館誕生70周年と日米関係を振り返って」を開催した。本学本館は70年前、太平洋戦争勃発日と同じ1941年12月8日に中島飛行機三鷹研究所として着工された。

高柳昌久・ICU高校教諭、三浦陽一・中部大学教授、武田(長)清子・ICU名誉教授(写真)による講演も行われ、約80名の参加者にとって、終戦後の日米のあり方を深く考える機会となった。



ワークショップ 「ピア・サポートにおける 『成長』とは?」を開催

本学アカデミックプランニング・センターが主催するワークショップが、12月10日に東ヶ崎潔記念ダイアログハウスで開催された。「ピア・サポート」とは、昨今、全国の大学で注目されている、相談者と同等の立場にあるアドヴァイザーがサポートを行う活動のこと。本学のアカデミックプランニング・センターはメジャー制度導入時の2008年度に開設され、「ピア・アドヴァイザー」と呼ばれる学生たちが活動を開始。現在は19名

のメンバーが3名の専任教職員とともに相談者への対応にあたっている。

ワークショップの第一部では、各大学でのピア・サポートの実践例などについて発表。第二部では活動の現状や今後の可能性について、活発な議論が展開された。

大学図書館員が 「日本図書館情報学会奨励賞」 を受賞

本学図書館・利根川樹美子パブリックサービスグループ長が、第40回(2011年度)「日本図書館情報学会奨励賞」を受賞した。この賞は「日本図書館情報学会」が図書館情報学の発展に貢献した会員に贈るもので、奨励賞は「学術研究上優れた業績を上げ、将来の活躍が期待される若手研究者」を対象としている。

大学燭火礼拝を挙行

12月16日、大学礼拝堂で燭火礼拝が行われた。礼拝では、デービッドW・ラッカム教授(心理学)と、カウンセラーとしてICU生を支えたゼノラ・ラッカムさん夫妻が「イエス様への贈り物」("What Shall I Give Him?")と題したメッセージを話された。礼拝の後には、同窓会主催によるキャロリングが行われた。



FDセミナー 「高等教育における 発達障がい学生支援」開催

12月20日、東ヶ崎潔記念ダイアログハウス・国際会議室で、FDセミナー「高等教育における発達障がい学生支援」が開催された。

講師は富山大学学生支援センターの吉永崇史特命准教授で、国内外における発達障がい学生の現状、その特性など概論を話した後、富山大学での修学支援の具体的事例を紹介した。

駐日EU代表部大使、 駐日クロアチア大使が来学

2012年1月26日、ハンス・ディートマール・シュヴァイスグート駐日EU代表部大使(写真左)が来学。東ヶ崎潔記念ダイアログハウス・国際会議室でユーロ危機に対するEUの対処、対イラン制裁の背景、対日関係などについて講演した。また、2月9日にはミラ・マルチネツ駐日クロアチア大使(写真右)が来学し、EU加盟の過程にあるクロアチアの国情について講演した。

どちらも、植田隆子教授が担当する『欧州の政治と国際関係』の一環として開かれたもの。多くの学生が耳を傾け、活発な質疑応答がなされた。



国連大学と教育交流 協定を締結

「本学大学院アーツ・サイエンス研究科」と「国連大学大学院修士課程サステナビリティと平和研究科」は4月、教育の交流を目指し、「教育交流に関する協定書」を締結。調印式は2月13日、本学で行われた。この締結を受け、学生の図書館相互利用が始まった。今後は、両研究科学生の交流などが期待されている。

気仙沼でICU生が ボランティア活動

Service Initiative Network/東北アクションプロジェクト(SINTAP)にICU生ら41名が参加し、3月5日から4日間、宮城県気仙沼大島でボランティア活動を行った。参加者にはJICAの支援を受けてICUで学ぶ大学院生や9月入学の留学生も含まれ、ICUらしい国際色豊かな顔ぶれとなった。

活動は現地対策本部のプログラムに沿って、5つのグループに分かれて活動。被災した民家から漁業用網の運び出し、カキ養殖の補助作業、被災地域のがれき運搬などにあたった。

また、ボランティア作業の合間に、被災者から体験談を聞いたり、現地で活動するボランティアや非営利機関の方々の話を聞いたり、現地の子どもたちと国際交流を図るなどした。

夜には宿舎で振り返りの時間を持ち、サービスについて、東北地方の現実や震災、復興や人々の絆などについても、参加者全員が深く考えることができた。単にボランティア活動に参加した

ということにとどまらず、サービスラーニングに実績のあるICUにふさわしいプログラムとなった。



撮影：村上むつ子 教員

春季卒業式と 「Friends of ICU賞」授与

3月22日、大学礼拝堂で春季卒業式が挙行され、学部生・大学院生あわせて598名が学位記の授与を受けた。本学では3月と6月の年2回、卒業式を行っているが、昨年は3月の卒業式が震災の影響で中止されたため、春季としては2年ぶりの式となった。

また、式の中でデービッドW・ラッカム教授(心理学)に「Friends of ICU賞」が授与され、「27年余にわたる献身的な支援を通じて、さまざまな困難を抱える学生を導いてきた」と受賞の理由が紹介された。



600名の新入生を迎えて 春季入学式を挙行

4月3日、大学礼拝堂で春季入学式が行われた。学部・大学院あわせておよそ

600名の新入生を迎えた。

式では、西尾隆教養学部長、ジェレマイア・オルバーク教養学部副部長、鈴木寛教養学部副部長、岩切正一郎アドミッションズ・センター長、小瀬博之アカデミックプランニング・センター長、佐々木輝美大学院部長が氏名を一人ずつ呼ぶと、新入生は元気よく返事をして立ち上がった。

新入生は全員、世界人権宣言の原則に立ち行動することを宣誓する「学生宣誓」に署名。新入生はICU生としての第一歩を踏み出した。



アイルランド文化に親しむ Irish Poetry Month 開催

4月11日から4月26日まで、アイルランドの文化に親しむためのイベント「Irish Poetry Month」が開催された。イベントはW・B・イェーツの生涯と業績を讃える展示を始め、JICUFの助成により招聘されたピーター・マクドナルド博士(オックスフォード大学クライストチャーチ・文学/28ページ写真左)による講演やワークショップ、ジョン・ニアリー駐日アイルランド大使(28ページ写真右)による講演が行われた。

マクドナルド博士は講演で、イェーツの作品が後生の詩人たちにどのような影響を与えたかを詩を通して読み解いた。さらにこの偉大な詩人が残した作

品をいかに継承、あるいは批判的に捉えるのかという後生の詩人の苦悩について論じた。また、ジョン・ニアリー大使はアイルランドの歴史や政治、文化などに関して講演した。

参加した学生は「アイルランドを身近に感じることができて、新たな興味がわいた」と感想をのべた。



行政事務部、教務部で 組織再編を実施

4月1日より、教務部国際教育交流グループが担当していた9月入学選考業務は同じ教務部内のアドミッションズ・センターに移管され、アドミッションズ・センターは学部の入学選考を一元的に行う独立した部署となった。

一方、国際教育交流グループは、学生の海外派遣・受入を行政の方針の下で広範に行っていくため、行政事務部の一部となり、大学広報を担当するパブリックリレーションズ・オフィスは学長の下でより戦略的広報を実行していくため、行政事務グループ内に移動した。

《新任教員の紹介》

4月1日付けで以下の教員が着任した(敬称略)

〈アーツ・サイエンス学科〉溝口剛(教授、生命科学)、寺田麻佑(准教授、法学・公共政策)、清水安夫(准教授、保健体育科)、クリストファー・ボンディー(准教授、社会学・日本研究)、西川葉澄(特任講師、世界の言語)、福田哲哉(准特任講師、リベラルアーツ英語プログラム)、ティナ・マティカイネン(准特任講師、リベラルアーツ英語プログラム)、江田早苗(客員准教授、言語学)

お知らせ 授業料等納付について

授業料等大学納付金の期限は次の通りです。期限までのご入金／お振込をお願い申し上げます。

納付期限

2012年度	自動引き落としの場合	振込の場合	引き落とし通知／振込依頼書
	自動引き落とし日	納付期限	
2学期 (Autumn)	8月27日(月) ※ID No.が061で始まる学部学生も8月27日(月)引き落としです。	9月5日(水)	8月16日に引き落とし通知／振込依頼書を発送します(予定)
3学期 (Winter)	11月26日(月) ※ただし、ID No.が061で始まる学部学生は11月27日(火)引き落としとなります。	12月4日(火)	11月15日に引き落とし通知／振込依頼書を発送します(予定)

納付金額(各学期)

2012年度			授業料	施設費	合計
教養学部 (CLA)	2008年度以降入学者		¥339,000	¥114,000	¥453,000(+寮費)
	2007年度以前入学者	理学科(NS)	¥339,000	¥133,000	¥472,000(+寮費)
		理学科以外(other)	¥339,000	¥111,000	¥450,000(+寮費)
大学院 (GS)	2010年度以降入学者	理学専攻(NS)	¥302,000	¥149,000	¥451,000(+寮費)
		理学専攻以外(other)	¥302,000	¥111,000	¥413,000(+寮費)
	2009年度以前入学者	理学研究科(NS)	¥302,000	¥149,000	¥451,000(+寮費)
		理学研究科以外(other)	¥302,000	¥111,000	¥413,000(+寮費)

※寮費は寮毎・学期毎に異なります。寮費については学生サービス部にお問合せ下さい。

TEL: 0422-33-3069 E-MAIL: housing-office@icu.ac.jp

不明な点は経理グループまでお問合せ下さい。

TEL: 0422-33-3028 E-MAIL: accounting-office@icu.ac.jp

Commemorating the History of ICU's University Hall and 70 Years of U.S.-Japan Relations

70 years ago on December 8, the construction of the Nakajima Aircraft Mitaka Research Institute started at the site of the University Hall on the day of the outbreak of the war with the U.S. On December 10, 2011, the Institute of Asian Cultural Studies (IACS) hosted a meeting to commemorate the 70-year history of the University Hall and U.S.-Japan relations, as part of the 60th Anniversary Project. During the meeting, Mr. Masahisa Takayanagi of ICU High School, Chubu University Professor Yoichi Miura and ICU Professor Emeritus Kiyoko Cho gave lectures. For the 80 attendants, the meeting provided an opportunity to learn what was happening on the ICU campus at the outbreak of war with the U.S. and the history of U.S.-Japan relations after WWII.

Workshop: Growth Through Peer Support

On December 10, the ICU Academic Planning Center (APC) held a workshop entitled "Growth Through Peer Support." Peer support refers to advisors supporting their peers, an experimental endeavor implemented at many universities. When ICU adopted the major system in 2008, it established the APC with ICU Brothers and Sisters (IBS). At present, 19 IBS support students with 3 faculty members. During the workshop, attendants learned about peer support, its history, change and trend around Japan, and then took part in active discussions with faculty, staff and external specialists on the status quo, objectives and future prospects.

ICU Librarian Receives Japan Society for Library and Information Science Incentive Award

ICU librarian, manager of Public Service Group, Kimiko Tonegawa received the 40th Library and Information Science

Incentive Award at the 59th Japan Society of Library and Information Science Annual Conference. The society praises contributions to library and information science, and it presents the Incentive Award to promising young researchers who make considerable achievements in academic studies.

Candlelight Service

On December 16, a candlelight service was held to celebrate Christmas in the university chapel. Psychology Professor David W. Rackham gave a message entitled "What Shall I Give Him?" The Alumni Association organized a caroling group after the service.

Faculty Development Seminar

On December 20, the Faculty Development Seminar entitled "Support for Students with Developmental Disabilities in Higher Education" was held in the international conference room of the Dialogue House. Associate Professor Takashi Yoshinaga of Toyama University Student Support Center talked about the global status of students with developmental disabilities. He then gave an overview of actual examples of support offered at Toyama University, with experts, faculty and parents working as a team.

E.U. Ambassador and Ambassador of the Republic of Croatia to Japan Lecture at ICU

On January 26, 2012, H.E. Mr. Hans Dietmar Schweisgut of the Delegation of the European Union to Japan lectured at ICU. The ambassador gave a lecture entitled "Challenges to the E.U. and the Future of E.U.-Japan Relations," covering the E.U.'s response to the Euro crises, background to the sanctions against Iran and relations with Japan. On February 9, H.E. Ms. Mira Martinec, the Ambassador of the Republic of Croatia to Japan lectured about the process Croatia went through to become a member of the

European Union. Both lectures were held as part of Professor Takako Ueta's Politics and International Relations in Europe course. Many students attended both lectures and afterwards there was a lively question and answer session.

Educational Exchange Agreement with United Nations University

In this April, the ICU Graduate School of Arts and Sciences entered an agreement with the United Nations University Institute for Sustainability and Peace. The agreement aims for educational exchange and a ceremony to sign the agreement was held at ICU on February 13. Representing the majority of ICU's relationship with the UN University is ICU students' participation in the UN University's "Joint Courses." With the start of this agreement, there also begins in AY2012 a system for reciprocal use of libraries.

ICU Students Volunteered in Kesennuma

As part of Service Learning, 41 ICU students and others joined Service Initiative Network/Tohoku Action Project (SINTAP) and took part in volunteer activities in Kesennumaoshima of Miyagi Prefecture for 4 days from March 5. Among the participants were several graduate students of which some were sponsored by JICA to study at ICU and others were international students who had entered ICU in September. They were divided into 5 groups in accordance with the programs designated by the local task force, and engaged in bringing out fishing nets from damaged houses, in assisting oyster farming, or in hauling debris from the affected areas. They also had the opportunity to listen to earthquake victims give accounts of their experiences, speak with volunteer and NPO workers, or interact with local children. Back in their lodging at night, there was

time for all participants to reflect on the services offered, quake reconstruction, restoration and inter-personal relationships.

This was not just another volunteer activity but a program typical of ICU that has a track record in Service Learning.

Spring Commencement Ceremony and the Friends of ICU Award

On March 22, ICU held its spring commencement ceremony, where 598 students from the College of Liberal Arts and Graduate School received degrees. ICU holds 2 commencement ceremonies each year, in March and June. Last year, however, the March commencement ceremony had to be canceled in the wake of the Tohoku earthquake and tsunami, making this the first spring commencement to be held in 2 years. At the ceremony, David W. Rackham, professor of psychology, was presented with the Friends of ICU Award. With the presentation of the award, was read "Through [his] devoted support over some 27 years, [he has] offered guidance to students with various difficulties."

ICU Holds Spring Matriculation Ceremony with 600 New Students

ICU held its spring 2012 matriculation ceremony on April 3, where approximately 600 new students entered the College of Liberal Arts and Graduate School. At the ceremony, each member of the incoming class was introduced by name by Takashi Nishio, dean of the College of Liberal Arts; Jeremiah L. Aldberg and Hiroshi Suzuki, associate deans of the College of Liberal Arts; Shoichiro Iwakiri, director of the Admissions Center; Hiroyuki Kose, director of the Academic Planning Center; and Teruyoshi Sasaki, dean of the Graduate School. All members of the incoming class took ICU's "Student Pledge" by which they swear to act according to the principles of the Universal Declaration of Human Rights.

Together with the long awaited approach of spring, members of the incoming class took their first step as ICU students.

Getting Acquainted with Irish Culture Irish Poetry Month

Irish Poetry Month, an event aiming to provide an opportunity to become acquainted with Irish Culture, was held from April 11 to 26. This included exhibitions honoring the life and work of W.B. Yeats, a lecture and workshop by Dr. Peter McDonald (Literature, Christ Church College, Oxford University) who was invited with the aid of JICUF, and lecture by H.E. Mr. John Neary, Ambassador of Ireland to Japan.

In his lecture, Dr. McDonald discussed how Yeats' works affected the later generation of poets, and their torments over how to pass down or take critical views of the great poet's achievements. H.E. Mr. John Neary gave a lecture on Irish history, politics and culture, etc. Students who attended the event said, "It was stimulating to feel a close connection with Ireland."

Restructuring Administrative Affairs Division and Educational Affairs Division

As of April 1, operations pertaining to September Admissions were transferred from the International Educational Exchange Group to the Admissions Center, integrating all admissions-related matters into the independent office of the Admissions Center.

The International Educational Exchange Group became a part of the Administrative Affairs Division in order to widely cover the dispatching of students overseas and enrollment of international students under the supervision of government's policy. The Public Relations Office was transferred to the Administrative Affairs Group, aiming at more strategic publicity activities under the direction of the President.

《New Faculty》

The following joined the faculty as of April 1.

<Division of Arts and Sciences>

Professor Tsuyoshi Mizoguchi (Bioscience)/Associate Professor Mayu Terada (Law, Public Policy)/Associate Professor Yasuo Shimizu (Department of Health and Physical Education)/Associate Professor Christopher Bondy (Sociology, Japan Studies)/Tokunin-koshi Hasumi Nishikawa (World Languages)/Adjunct Instructor Tetsuya Fukuda (English for Liberal Arts Program)/Adjunct Instructor Tiina Matikainen (English for Liberal Arts Program)/Visiting Associate Professor Sanae Eda (Linguistics)



News from the ICU High School

校長報告

どんぴしゃり! 2012年、遅い桜が満開になった4月7日、ICU高校は229名の新生を迎えて入学式を行いました。好天にも恵まれ、会場の大学チャペルは1階も2階も座りきれないほどの満員でした。あれから2週間、生徒たちに声をかけると口々に返ってくる言葉。「楽しい!」「めっちゃ楽しい!」「友だち、友だち、すごい、みんなすごくユニーク!」「ノリ、ノリ、ノリがいい!」「先生も個性的、すごくおもしろい!」。今年も世界中からやってきた若い高校生たちのエネルギーです。(国際基督教大学高等学校 校長 中村一郎)

学校防災用品を緊急整備

東日本大震災をうけ、全ての学校が3日間程度は子供達の安全を確保できる環境を構築できるよう、東京都より私立学校防災用品緊急整備費助成事業による防災備蓄物資の購入に要する経費助成の通知がありました。本校も申請して726万円の助成金を受け、備蓄用の水、食糧、毛布、簡易トイレなどを購入し、緊急時の備えを強化することができました。

3年生の修学旅行

4月24日から、沖縄へ3泊4日の修学旅行に行きました。古代の沖縄の姿から、沖縄戦、現代の基地問題などを、それに関わる現地の方々に直接お話を聞き、自分の目で見て、手で触れて、これからどう関われるのかを考えました。3日目は、各人の問題意識に従って、沖縄固有の自然や文化に、より深く触れる経験を持つことができました。

2年生の春の遠足

4月27日、2年生は山梨県忍野村に行きました。現地ではほうとう作りを体験。ほとんどの生徒が初めての麺打ちにもかかわらず、皆手際よく作っていたことが印象に残りました。もちろん味もなかなかのものができました。午後は忍野八海を散策し、おのおのが自然を満喫したようです。楽しい一日を過ごすことができました。



フレッシュマンリトリート

初日の4月26日は、新しい仲間と飯盒炊さん。力をあわせカレーライスを作りました。夜は河口湖のホテルに宿泊。関心を持つ世界の諸地域ごとに分かれ、学校祭での発表にむけて話し合い、その後クラスごとにゲームを楽しみました。翌27日は礼拝を持ち、オルゴール美術館などを見学しました。

行事予定

学校祭	9月21日(金)、22日(土)
体育祭※	9月27日(木) 非公開
学校説明会 (一般生・帰国生合同) (予約不要)	10月13日(土)14:00~ 11月10日(土)14:00~
帰国生徒対象 入学ガイダンス (予約不要)	7月13日(金)10:00~ 8月10日(金)10:00~ 8月25日(土)10:00~

※雨天の場合は、高校体育館にて実施

上記に加えて夏休み時期に学校見学会(施設紹介)を行います。詳細は本校ウェブサイトでお知らせします。

《新任教諭の紹介》



マイケル・エリス
(外国語科)

「生徒一人一人の個性を引き出せるようにがんばりたいと思います」

Report from the Principal

On April 7, ICU High School welcomed 229 new students at the matriculation ceremony. Blessed with fine weather, the first and second floors of the University Chapel were filled to capacity.

Equipping School Emergency Supplies

Following the Great East Japan Earthquake, all schools are now required to provide a facility that can safely support children for three days. Upon receiving application from ICUHS, the Tokyo Metropolitan government granted a subsidy of ¥7.26 million to be spent on increasing the supply of water, food, blankets, portable bathrooms, etc. thus enabling us to increase our emergency preparedness.

Third-year Excursion

A school excursion to Okinawa was held for 4 days and 3 nights from April 24. Students got firsthand experience listening to the locals talk about ancient Okinawa, about the war in Okinawa, about the problems with the military bases, and pondered on how they could get involved.

Second-year Field Trip

The second-year students went on a field trip to Oshino Village in Yamanashi Prefecture on April 27. Hoto noodle making went unexpectedly well even though it was the first time for most of the students.

Freshman Retreat

On April 26, new students joined forces to cook rice and curry on a campfire during the day, and stayed at a hotel on Lake Kawaguchi by night.

《New Faculty》

Michael Ellis (Foreign Language)
“I will do my best to bring out each student's unique qualities.”

春の一連の行事が終わり 力強く新年度にキックオフ

ICU同窓会の春の一連の行事は3月31日の「桜祭り」を頂点に賑やかに終わり、新年度へ力強いスタートを切りました。「桜祭り」は同窓会総会、DAY表彰式、卒業50周年記念、懇親会をすべて含むものです。

大学礼拝堂での同窓会総会では、永渕光恵会長(CLA21期、ID77)が再選され、新役員の任期2年が始まりました。永渕さんのリーダーシップの下に8人の副会長(学生部、広報部、財務部、事業部、総務部、組織部、大学部、募金部を担当)を含む32名の理事・監事、105名の評議員／学生評議員という体制で運営されます。役職者には新任者も多く、若返りの力も期待できます。

第7回DAY表彰式が 今年も行われました

社会的に際立った業績をあげ、ICUの知名度や魅力を高めることに貢献した同窓生を顕彰する「DAY (Distinguished Alumni of the Year)」の表彰式も、総会の行事としてなくてはならないものです。今年も各分野で優れた功績をあげた7名の同窓生が表彰されました。海外での仕事のため出席できなかった吉野直子さんは代読となりましたが、受賞者の皆さんの挨拶はどれも感銘深く、ICU教育の成果の素晴らしさを物語ってあまりあるものでした。

〈DAY受賞者〉

千葉 果弘さん(CLA1期、ID57)
元ユネスコ職員、ICU教授、世界の基礎教育、識字教育の普及に努める。

松井 亮輔さん(CLA7期、ID63)
卒業後一貫して弱者の福祉のために国内外で貢献。

小池 生夫さん(大学院64年修士修了)
日本の学校英語教育の向上に貢献。

栗山 富夫さん(CLA8期、ID64)
松竹映画監督として『釣りバカ日記』などの人気作品を多数手掛ける。

ディルワース(福山)真智さん
(CLA11期、ID67)

米国農務省、同国立科学財団などを舞台に植物行政の分野で実績を築く。

下館 和巳さん

(CLA22期、ID78、83年大学院修士課程修了)
東北学院大学で英文学を教える傍ら、シェークスピアカンパニーを主宰。同窓会東北支部のまとめ役としても貢献。

吉野 直子さん(CLA34期、ID90)
世界的に活躍するハープ奏者。

卒業50周年を迎えた 6期生36名が集まりました

今年は6期生(ID62)が、卒業50周年を迎える期の方々として招待され、6期生のうち36名が出席しました。この頃は入学生が120名余りで、今と較べるとずいぶん少数ですが、約3分の1の方々に出席していただきました。代表して山岡清二さんが献学まだ日の浅かった当時の思い出などを話しました。

最後に北城恪太郎理事長が挨拶をして、大学への同窓生の支援を呼びかけ、この日を最後に8年間の学長生活



を終えICUを去る鈴木典比古学長が、リベラルアーツ大学としての本学が世界に誇る大学になることを確信していると語りました。

国内外から集まった約200名が 懇親会に参加しました

午後からの懇親会は場所をダイアログハウスの食堂に移し、大学関係者、現役学生もふくめ約200人が参加しました。遠くドイツから参加したタイヒラー曜子さん(CLA10期、ID66)と北海道札幌からの穴水重雄さん(CLA9期、ID65)が乾杯の音頭をとり、今年のPeace Bell Scholar7人も演壇に立ち、盛大な拍手を受けました。



同窓会理事／評議員による 懇親会を行いました

4月15日には、東京・青山の会場に今年度から2年間同窓会理事／評議員を務める者が集合、同窓会の意気込みとゴールを再確認し互いを知る懇親の集いがありました。ここにも北城理事長、日比谷潤子新学長はじめ大学幹部が出席し、同窓会に対する期待と大学側の決意を表明しました。

同窓会は、来年の献学60周年に向け、大学とICUの理念の共有を深め、その実現にともに働くことを新年度のモットーとしています。



JICUFのニュース

News from JICUF

The Japan ICU Foundation, Inc.
日本国際基督教大学財団
475 Riverside Drive, Suite 439
New York, NY 10115 USA
TEL: 212-870-3386
E-MAIL: information@jicuf.org

Sake Tasting for ICU's Earthquake Relief Efforts at Penn Club in New York City

The Japan ICU Foundation (JICUF) hosted a Sake Tasting at the Penn Club in New York City on March 5, 2012, to help raise funds for International Christian University's (ICU) ongoing relief and rebuilding efforts after the devastating Great East Japan Earthquake of March 11, 2011.

Close to 100 esteemed guests from the US, Japan and many other countries came for the evening in support of this charitable event, which was organized by JICUF Program Director Tara DeWorsop. Mark Flanigan (JET* Alumnus), a current ICU Rotary International Peace Fellow, gave a short keynote presentation describing the variety of ways in which ICU has been supporting the recovery efforts. These include a new joint-psychological relief program in Sendai, continuing student volunteer efforts and the Earthquake Tuition Waiver Fund.

The Sake Tasting was led by sake connoisseur Timothy Sullivan from UrbanSake.com and the sake for the event was graciously donated by Joto Sake. The founder of Joto Sake, Henry Sidel, was a student at ICU's Summer Japanese Language Program in the late 1980s.

A silent auction of different Japan-related goods, including a rare Kimono, also took place during the same event. In total, approximately \$10,000 was raised from the evening. These funds raised will support the work of the East Japan Center for Free Clinical-Educational Service in Sendai. The Center was



founded by ICU Professor Hidefumi Kotani after the disaster and provides free psychological counseling to survivors from March 11. Funds will also go to support the efforts of ICU students who continue to volunteer in the Tohoku region, as well as the Earthquake Tuition Waiver Fund for those ICU students whose families were impacted by the unique triple-disaster.

*JET: The Japan Exchange and Teaching Programme

ニューヨーク市ペンクラブで 震災支援活動の一環として 日本酒の試飲会を開催

日本ICU財団(JICUF)は3月5日、東日本大震災の支援活動の一環としてニューヨーク市にあるペンクラブで日本酒の試飲会を開催しました。日本酒専門サイト「UrbanSake.com」のティモシー・サリババンさんが司会をつとめ、日本酒は、80年代後半にICUの夏期日本語教育への参加経験のあるヘンリー・サイデルさんが創設したJoto Sakeより提供されました。

アメリカ、日本ほか各国から約100人が参加し、当日は現ICUロータリー

国際平和フェローのマーク・フラニガンさん(JET※¹同窓生)による、ICUの支援する救援活動についての基調プレゼンも行われました。また、仙台で始まった無料臨床サービスや、学生により続けられているボランティア活動、東日本大震災の被災学生支援などの説明もありました。

同じ会場で行われたチャリティオークションでは希少価値の高い着物をはじめ日本にまつわる品々が出品され、約1万ドルを売り上げました。この収益金は仙台で運営されている震災復興心理・教育臨床センター※²の支援にあてられるほか、東北地方でボランティア活動を行っているICU生たちへの支援

や、家族が被災したICU生たちのための給付奨学金に使われる予定です。

※¹ JET: 語学指導等を行う海外青年招致事業。

※² 震災生存者に無料の臨床カウンセリングを提供することを目的に、本学の小谷英文教授によって設立されました。



2011年度 募金活動報告

皆様のご支援への感謝と献学60周年記念事業募金の初年度の状況について

財務理事・献学60周年記念事業 記念募金委員会実行委員長 白石 隼男

2011年3月に東日本大震災が発生し、被災された皆様には心からお見舞いを申し上げます。2011年度は、日本社会全体が災害からの復旧のために全力を傾注している中、ICUの募金活動は、年度の前半は被災学生の支援に力を注ぎ、年末より、献学60周年記念募金の活動を本格的に開始しました。

保証人、ご父母、卒業生、法人、教職員などの多方面から、本学のリベラルアーツ教育の深化と学生の修学支援のために多大なる御協力をいただきました。これも皆様の深いご理解の賜物と深く御礼申し上げます。

以下に2011年度の募金事業の実績についてご説明いたします。

おかげさまで、2011年度のFriends of ICU(FOI)資金残高(年度毎に奨学金等へ支出した後の額面)は、9億3千4百万円に達しました。収入における大学分と高等学校分の一般寄付合計は1,629件で、2億1千6百万円になりました。大学分にはICU Peace Bell 奨学金へのご寄付3千2百万円が含まれています。

これまでのご支援に対する感謝とともに、引き続き、募金活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

2011年度寄付金決算 (2011年4月1日～2012年3月31日)

(単位：円)

収 入 の 部		
科 目	件 数	金 額
I. 一般寄付		
1. 大学分	1,594	215,972,138
(うちPeace Bell奨学金)	(712)	(31,615,430)
2. 高校分	35	480,000
一般寄付小計 1+2	1,629	216,452,138
3. その他収入 (預金利息等運用収入等)		9,286,856
一般寄付 小計 1+2+3 (A)		225,738,994
前(2010)年度繰越金 (B)		580,163,648
合 計 (C)=(A)+(B)		805,902,642
II. 在校生保護者寄付		
1. 教育研究資金(大学)	106	18,880,000
2. 教育充実資金(高校)	118	17,000,000
在校生保護者寄付 合計 (D)	224	35,880,000
III. その他寄付		
1. JICUF寄付(注1)		90,571,118
2. ロータリーからの東ヶ崎潔記念ダイアログハウス募金		15,329,413
3. 現物寄付(注2)		28,126,738
4. その他寄付		1,241,767
その他寄付 合計 (E)		135,269,036
寄付金総収入 合計 (F)=(C)+(D)+(E)		977,051,678
次年度繰越金内訳 (H)		
国債		350,488,681
普通預金		381,429,661
第3号基金FOI分残高(2012年3月31日現在) (M)		201,958,002
Friends of ICU大学基金		195,215,364
Friends of ICU高校基金		6,742,638
FOI資金 合計 (N)=(H)+(M)		933,876,344

支 出 の 部	
科 目	金 額
I. 一般寄付による支援事業	
1. 大学分	73,804,300
(うちPeace Bell奨学金)	(44,010,000)
(うち被災学生支援)	(6,755,000)
(うち大学教育研究施設)	(4,380,000)
2. 高校分	180,000
支 出 小 計 (G)	73,984,300
次年度繰越金 (H)=(C)-(G)	731,918,342
合 計 (I)=(G)+(H)	805,902,642
II. 在校生保護者寄付	
1. 教育研究資金(大学)に充当	18,880,000
2. 教育充実資金(高校)に充当	17,000,000
合 計 (J)	35,880,000
III. その他寄付	
1. JICUFによる支援事業に充当	90,571,118
2. 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス建設費用に充当	15,329,413
3. 現物寄付(注2)	28,126,738
4. その他各使途に充当	1,241,767
合 計 (K)	135,269,036
合 計 (L)=(I)+(J)+(K)	977,051,678

(注1) JICUF経由のPeace Bell奨学金(4,229,999円)、クリス和田Named Room(369,415円)、香港留学生会Named Room(1,346,373円)、フィールド人工芝化(48,714円)は一般寄付大学分に計上。

(注2) 寄贈された物品の金額。

◆被災学生への支援

昨年3月11日に東日本大震災が発生し、その直後に献学60周年記念募金活動を本格的に開始することは困難であると判断し、被災直後は、震災にあった学生への支援のための募金活動に重点を置きました。2011年度末までに約1,800万円の募金を得て、被災した学生に対し、授業料・施設費免除(22名)、入学金免除(3名)、入学検定料免除(34名)、緊急就学支援金の提供(34名)を行い、総計約1,530万円の支援を行いました(このうち、856万円は大学予算より支出)。この支援活動は、2012年度も継続して行います。

◆献学60周年記念事業募金

献学60周年記念事業のテーマ「Dialogue(対話)」の下に、①キャンパス・教育環境の改善、②給付奨学金制度の充実、③アカデミック・プログラムの充実、の3つの事業を柱として、2011年度より献学60周年記念事業募金を開始しました。

①については、キャンパス・マスター

プラン委員会で、キャンパス全体の空間デザインの指針、環境を維持していくためのルールを定めたキャンパス・マスタープランの報告書を取りまとめました。②については、次項以下で詳しくご説明します。③については、1)大学の使命・時空間を越えた対話、2)分野間の対話、3)少人数教育における教員・学生間の対話、4)文明間・宗教間の対話、5)東アジアにおける対話、の5つのフォーカスに即して、様々なイベントを実施しました。報告は献学60周年記念事業のホームページにて公開しています。
<http://subsite.icu.ac.jp/anniv60/>

◆募金活動について

献学60周年期間中の募金総目標額を36億円(キャンパス・教育環境の改善:18億円、給付奨学金制度の充実:15億円、アカデミック・プログラムの充実:3億円)と定め、Creating the Next 60 Years(次の60年を目指して)をキャッチフレーズとして掲げた募金趣意書を年末に作成・配布し、募金活動を本格的に開始しました。数回の拡大募金委員会での審議を経て第1回推進委員会を

2012年3月末に開催し、積極的に募金活動を行うことが確認されました。2011年度末までに集まった募金総額は、約14億円です(JICUFからの過去の送金分を含む)。

2011年1月から、学校法人に対する寄付金の免税特典が大幅に拡大しました。ICUへの寄付金は所得税の所得控除に加え、税額控除の対象となり、これを周知する文書を配布しました。

また、11の体育会系クラブの現役とOBOG会で構成するフィールド人工芝生化協議会からの要望を受け、6千万円の寄付が集まれば同額を大学が負担をしてフィールドの人工芝化を推進することが合意され、募金活動がスタートしました。

◆ICU Peace Bell 奨学金

同窓生の皆様の呼び掛けで始まったICU Peace Bell 奨学金は4年が経過し、第1期奨学生が卒業を迎え、卒業式の日に報告会を行いました。2011年度には新たに13名のPeace Bell Scholarを迎え、今年度までの奨学生入学者数は51名となりました。また、寄付の申し込みは累計で約3.5億円となりましたが、給付総額は約1.2億円となり、残高は前年度よりも1千万円マイナスの2.3億円となりました。より充実した奨学金制度としていくためにも、皆様の更なるご支援・ご協力をお願いいたします。

経済的必要度の特に高い志願者を対象として、授業料・施設費・寮費等(年間1人約200万円)を免除する特別枠を設けて、より幅広く優秀な学生が入学できる環境を整えることができました。2012年度より実施しております。これもご賛同くださる皆様のご支援によるものと深く感謝申し上げます。

献学60周年記念募金状況報告 (2012年3月末現在累計) (単位: 千円)

		プログラム合計		プログラム別							
				キャンパス・教育環境の改善		給付奨学金制度の充実		アカデミック・プログラムの充実		60周年募金全体への寄付	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
個人	寄付申込額(未入金分)	154	22,880	86	15,365	13	5,580	1	1,000	54	935
	入金済	2,126	256,978	772	64,059	977	164,291	8	5,010	369	23,618
法人	寄付申込額(未入金分)	2	50,000	0	0	0	0	0	0	2	50,000
	入金済	20	18,252	1	34	11	6,266	0	1,242	8	10,710
JICUF	寄付申込額(未入金分)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	入金済	—	1,050,101	—	974,650	—	49,318	—	26,117	—	16
合計	寄付申込額(未入金分)	156	72,880	86	15,365	13	5,580	1	1,000	56	50,935
	入金済	2,146	1,325,332	773	1,038,744	988	219,875	8	32,369	377	34,344
総合計(未入金分含む)		2,302	1,398,212	859	1,054,109	1,001	225,455	9	33,369	433	85,279
参考: JICUF除く場合 総合計(未入金分含む)		2,302	348,111	772	79,459	1,001	176,138	9	7,252	433	85,263

(注) 過去の周年事業対象となる寄付金も含む

特記事項としては、期ごとの呼び掛けを行ってくださった期のご支援者が増えていること、震災の影響にもかかわらず申込額も増えていることがあげられます。私どももこの奨学金の意義を広め、またさらに充実した制度とするよう引き続き努力してゆく所存です。

◆西潟眞澄奨学金の設置

西潟眞澄様(1期生、ご逝去)夫人の悠紀子様より、故人のご遺志に基づく1億円のご寄付があり、この基金をもとに、「西潟眞澄奨学金」を創設いたしました。東南アジア諸国からの留学生に対して、生活費を含めて必要な経費(授業料・寮費等)を支援することになりました(2012年度開始)。

◆留学生生活サポートプログラムの設置

匿名のお二人の方より、合計約3,100万円の遺贈があり、この基金をもとに「留学生生活サポートプログラム」を設置して、アジア、アフリカ、中南米からの留学生に対し、生活を支援することになりました(2012年度開始)。

◆国際ロータリー顕彰板の設置

東ヶ崎潔記念ダイアログハウス建設にあたり積極的に御協力いただいている国際ロータリーへの感謝を表すために、東ヶ崎潔記念ダイアログハウスの入り口に、顕彰板を設置しました。

◆Named Room

日米同時の募金活動が展開された和田(クリス)貞實(4期生)ルーム、香港からの元留学生が国境・世代を超えて募金活動を行った「香港留学生会」ルーム(以上学報No.29を参照)、そして、東南アジアの人材育成を目的とした支援活動を行っている一般財団法人「新倉会」の創始者を記念した「新倉藤吉」ルーム。いずれも「ダイアログ(対話)」のテーマに相応しいお名前を冠した3部屋が誕生いたしました。

2011年度末現在、Named Roomは合計で29(居室、スタディールーム、ラウンジ、会議室、枯山水)となりました。

※大切な方のお名前をICUに刻むことができるNamed Roomの対象スペースはまだ多少余裕がございます。詳細については、<http://web.icu.ac.jp/namedrooms/index.html>をご参照ください。

ICU Peace Bell 奨学金寄付申込状況(募金開始時からの累積)

2012年3月末現在 敬称略

同窓生 入学期	申込 者数 (人)	申込額 (円)	口座振替		同窓生 入学期	申込 者数 (人)	申込額 (円)	口座振替		個人冠名奨学金 グループ名等	申込 者数 (人)	申込額 (円)	口座振替	
			申込 者数 (人)	申込額 (円)				申込 者数 (人)	申込額 (円)				申込 者数 (人)	申込額 (円)
1期※	82	21,720,000	0	0	28期	2	13,000	0	0	橋本徹奨学金	1	4,000,000		
2期※	19	919,000	0	0	29期※	20	968,000	2	34,000	In Memory of Kikuo Matsunaga (茅野徹部・1期)	1	4,000,000		
3期※	45	5,756,000	3	96,000	30期	2	361,000	0	0	A & A Fujimoto Scholarship (藤本篤子・2期)	1	48,763,000		
4期※	60	43,443,000	3	46,000	31期	2	60,000	0	0	In Honor of Dr. D. S. Brewer (茅野友子・2期)	1	4,000,000		
5期※	48	17,122,000	0	0	32期	3	215,000	1	60,000	In Memory of Yoshihiro Akutsu (今村昌生・2期)	1	4,000,000		
6期※	73	6,208,000	3	34,000	33期	3	405,000	0	0	佐々木修(4期)・弘子奨学金	1	50,000,000		
7期※	44	8,962,000	1	10,000	34期	6	613,000	2	22,000	田中恭子(5期)奨学金	1	5,000,000		
8期※	67	7,650,000	8	218,000	35期※	3	64,000	1	12,000	ICU教会奨学金※	20	20,395,000	0	0
9期※	38	17,491,000	10	344,000	36期※	4	228,000	0	0	大学院卒業生(ICU学部卒を除く)	7	742,000	0	0
10期※	40	11,085,000	1	120,000	37期※	4	30,000	0	0	自動車部OB・OG会	1	100,000	0	0
11期※	81	3,690,000	2	20,000	38期※	4	90,000	1	10,000	10期前後のゴルフの会	1	230,000	0	0
12期※	12	1,266,000	0	0	39期※	7	135,000	0	0	同窓会ハワイ支部	1	20,000	0	0
13期※	31	3,310,000	2	80,000	40期※	5	182,000	2	20,000	鈴木ゼミOB・OG会有志	18	500,000	0	0
14期※	45	4,193,000	2	40,000	41期※	5	140,000	1	10,000	同窓生以外の方々	105	37,980,000	6	116,000
15期	10	4,325,000	0	0	42期※	3	70,000	1	10,000	香港留学生会	1	387,000	0	0
16期	1	11,000	0	0	43期※	6	71,000	1	10,000	総 計	1,118	349,990,000	83	2,090,000
17期	2	1,110,000	0	0	44期※	6	180,000	0	0	備考 1. ※印は期別等キャンペーン実施グループ。1期、3期、4期、5期、6期、7期の申込金は期別冠名を持つ奨学金として給付。冠名は次のとおり。1期:「カール&エヴェリン・クライダー奨学金」、3期:「3期生奨学金」、4期:「4期生奨学金」、5期:「5期生奨学金」、6期:「6期生奨学金」、7期:「7期生奨学金」 2. 将来の寄付を含めた申込額(プレッジ) 3. 口座振替申込額は一年分の額 4. 遺贈分2件1,300万円を含む 5. JICUF経由分を含む 6. 在学生向け「ワンコインから」募金を含む 7. US\$での申込額のうち未入金額は1\$=80円で計算(為替レートは年度末に見直す) ※上記のため、2012年3月の申込額についての変動はなし。(2011年度は1\$=80円)				
18期	2	30,000	0	0	45期※	4	40,000	1	10,000					
19期	2	30,000	0	0	46期	1	40,000	1	10,000					
20期※	12	943,000	4	148,000	47期	8	405,000	1	36,000					
21期	3	550,000	0	0	48期	4	41,000	0	0					
22期※	41	2,103,000	13	398,000	49期	1	30,000	0	0					
23期※	37	1,043,000	2	22,000	50期	2	40,000	0	0					
24期※	11	1,198,000	2	24,000	51期	5	80,000	0	0					
25期	3	70,000	1	10,000	52期	2	50,000	1	10,000					
26期	3	60,000	0	0	53期	0	0	0	0					
27期※	31	1,009,000	4	110,000	54期	2	27,000	0	0					
					55期	0	0	0	0					

2011年度事業

I. 寄付金による奨学金受給者及び各賞受賞者

1. 奨学金受給者

■ICU Peace Bell 奨学金

2011年度入学奨学生13名

藤岡直樹、古橋舞七海、花田幸恵、町村美紗、松島周子、松澤唯、下田華子、田中勇輝、宇佐美奈央、山本早弥花、Caitlin Arde、Nolan Bunes、Jena Hayama

2011年度卒業奨学生10名

(2008年度入学第1期奨学生)

芦田加奈、長谷川ゆみ、今井美佐、君島梨央、長田彩湖、佐藤渚、竹内玲、寺田雅美、坪木曜一郎、牛島彩華

2011年度までの奨学生総数(入学時点)51名(氏名省略)

■都留春夫奨学金

荻本快

(教育学研究科博士後期課程)

■クリス和田奨学金

亀井彰人(アーツ・サイエンス学科)

■社会人特別入学試験学生Y奨学金

嶺岸和城、庄子沙也香、西井瞳、

佐藤直樹(以上アーツ・サイエンス学科)

■「斎藤勇先生記念」清水護奨学金

茅野風歌(アーツ・サイエンス学科)

■K奨学金(留学生)

Samantha H. Landau

(比較文化研究科博士後期課程)

■K奨学金(日本人)

小島明宏(アーツ・サイエンス研究科博士前期課程)

※「サービス・ラーニング奨学金」は該当者なし

2. 各賞受賞者

■Friends of ICU 賞

David W. Rackham

(教養学部アーツ・サイエンス学科教授 2012年3月退職)

■Friends of ICU 高等学校賞

久司徹治(ICU高校2年)

■Friends of ICU 学術奨励賞

◆トロイヤー教育賞

芦田加奈(アーツ・サイエンス学科)

◆高山晟・経済学奨励賞

荒井和人、川越洋介、田内実花子
(以上アーツ・サイエンス学科)

◆ベトナム研究奨励賞

Thi Hien Nguyen

(行政学研究科博士前期課程)

◆長清子アジア研究学術奨励賞

Warren A. Stanislaus(語学科)、
田中萌葵(アーツ・サイエンス研究科博士前期課程)

◆安積仰也社会学賞

山邊温子(アーツ・サイエンス学科)

◆理学奨励賞(大学院)

山本光(アーツ・サイエンス研究科博士前期課程)

◆理学奨励賞(学部生)

石野萌、米良花香(以上アーツ・サイエンス学科)

・ゲーデル基礎科学賞

藤沼祥成、長島潤(以上アーツ・サイエンス学科)

※「斎藤眞平和研究学術奨励賞」「斎藤眞アメリカ研究学術奨励賞」「功刀達朗グローバル・ガバナンス研究賞」「小出詞子日本語教育奨励賞」「マサの平和構築論賞」は本年度該当者なし。

II. 支援事業

1. キャンパス・教育環境の改善

■大学教育研究資金(在学生保護者寄付)

18,880,000円

以下の事業の一部に教育研究資金
2011年度分を充当

○本館教室および英語教育プログラムをはじめとする理学系授業以外でも利用頻度の高い理学館N220教室のマルチメディア化

○学内ポータルサイトの構築

○総合学習センターの学習用コンピュータの更新

■ロータリー関係者からの寄付

15,329,413円

東ヶ崎潔記念ダイアログハウス建設費の一部に充当

■Named Room寄付

東ヶ崎潔記念ダイアログハウス建設費の一部に充当

4,000,000円

■キャンパスの自然環境保全

380,000円

■堀内彩子メモリアル図書資金

499,927円

■図書館企画支援資金

212,373円

■高校体育館建設資金

160,000円

【Japan ICU Foundationからの支援事業】

オスマー図書館貸付金返済

(2011年度分) 58,237,000円

Named Room寄付：東ヶ崎潔記念ダイアログハウス建設費の一部に充当

(2011年度分) 288,225円

2. 給付奨学金制度の充実等 (表彰及び学生支援を含む)

■ICU Peace Bell 奨学金

44,010,000円

■使途指定寄付からの奨学金

4,887,000円

■東日本大震災の被災学生支援

6,755,000円

■Friends of ICU 賞

300,000円

■Friends of ICU 高等学校賞

20,000円

■Friends of ICU 学術奨励賞

650,000円

■課外活動支援資金

大学同窓会主催ICU Dreamコンペ協賛金として

200,000円

使途指定による部活動への助成

540,000円

【Japan ICU Foundationからの支援事業】

JICUF給付奨学金

8,473,920円

JICUF冠基金奨学金

4,070,945円

東日本大震災の被災学生支援

3,818,609円

ICU高校生Student Global Leadership Programへの参加支援

182,224円

東北カウンセリングプログラムに対する支援

1,173,195円

3. アカデミック・プログラム

■M記念教育基金

11,360,000円

■朝日新聞社寄付講座(「メディア研究入門」「人権とメディア」)

1,000,000円

■ロータリー財団からロータリー平和センターへの支援

234,000円

■その他使途指定寄付からの支援

10,000円

【Japan ICU Foundationからの支援事業】

短期滞在の客員研究者への支援

418,379円

客員教授(1学期間)への支援

\$25,000.00

4. その他支援事業

■高等学校教育充実資金(新入学生保護者寄付)

17,000,000円

新高校体育館建設資金の一部に充当

■現物寄付

ご支援のお願い

ICUでは献学の節目である2013年を中心に、2011年度から2015年度までの5年にわたる「献学60周年記念事業」を展開しており、皆様のご支援をお願いしています。「献学60周年記念事業募金」は主にキャンパス・教育環境の改善、給付奨学金制度の充実、アカデミック・プログラムの充実に役だたせていただきます。皆様からのご支援をお待ちしております。

■ご寄付の方法について

① 銀行・ゆうちょ銀行からの振込み

国内の金融機関にてお振込みいただけます。専用の払込取扱票で、ゆうちょ銀行、みずほ銀行、三菱東京UFJ銀行の本・支店から振込まれる場合、手数料は無料です。ご連絡いただけましたら専用払込取扱票をお送りいたします。

② クレジットカードによる支払い

VisaかMasterがついたクレジットカードをお持ちの方は、ICUホームページから簡

単な操作で24時間いつでもご寄付いただけます。

③ 預金口座からの自動振替

お持ちの金融機関の口座からご希望の一定額を定期的に振替えさせていただく方法です。一回の手続きで継続的に支援していただくことができます。ご連絡いただきましたら所定の申込用紙をお送りいたします。

※アメリカ・カナダ・メキシコ在住の皆様は免税特典・送金の簡便さなどから、Japan ICU Foundation(<http://jicuf.org/>)を通じてのご寄付をお願いしております。

※ご寄付の方法や寄付控除についてはFriends of ICUホームページでご案内しております。ICUホームページ(<http://www.icu.ac.jp/>)上部「卒業生の方」をクリックし、右中央「CLIP BOARD」内の「ICUへのご支援」をクリック。

寄付控除について

2011(平成23)年度の税制改正に伴い、ご寄付の免税恩恵が拡大され、個人の方のICUへのご寄付について寄付金額の40%を所得税から税額控除できるようになりました。一般的に、この税額控除制度は、既存の所得控除より減税効果が大きく見込めます。ICUへの寄付金は、所得税・法人税・相続税の税制上の優遇措置が受けられます(高等学校教育充実資金を除く)。

遺贈について

遺贈によりICUへご寄付いただきました財産には、原則として相続税が課税されません。また、ご相続人から申告期間内にご寄付いただいた場合も相続税の非課税財産となります。提携信託銀行のご紹介などにつきましても、お気軽に事務局までご相談ください。パンフレットもご用意しております。

お問合せ・資料請求先：国際基督教大学 法人業務部 Friends of ICU事務局

TEL: 0422-33-3041 FAX: 0422-33-3763 E-MAIL: foi@icu.ac.jp ホームページ: <http://subsite.icu.ac.jp/fundraising/>

寄付者ご芳名

2011年度中(2011年4月1日～2012年3月31日)に次の方々からご寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。

(敬称略、姓アルファベット順)

一般寄付【個人：912名 法人・団体：19 総額216,452,138円】

①100万円以上 (個人：22名 法人・団体：5)

石川正枝 嵩恭子 川口勉 北城恪太郎 喜吉憲 黒田吾妻 西潟悠紀子 齋藤顕一 櫻井丘子 佐々木修 白石隼男 鈴木典比古 田口俊明 谷静子 梶尾旭亮 都留伸子 渡辺美時雄 山本和 谷代正毅 (株)ICUサービス 国際基督教大学教会 一般財団法人新倉会 三機工業(株) 東京ケータリング(株) 匿名3名

②50万円以上100万円未満 (個人：7名)

青山竜士 日比谷潤子 飯田助知 折田昌子 高橋正一 渡辺勝夫 匿名1名

③10万円以上50万円未満 (個人：97名 法人・団体：5)

網野ゆき子 朝倉敏夫 坂野尚子 土橋喜人 萩原恵三 林修史 日比野路子 日野原重明 石井一輔 磯田泰男・幸子 伊藤誠子 泉国文 神保尚武 鹿野和子 関歳美季 勝田正佳 川崎昇 川島重成 北川彌生 古曳旅人 古村浩三 小中山彰 近藤隆雄 古藤晃 倉橋暢子 栗島重和 栗山昌子 黒崎精三 林和甫 増淵稔 舩本寛 松平健 宮崎悦郎 森順一 森裕 盛田兼由 諸星裕 村上透 室崎肇 永淵光恵 長瀬直子 長嶋豊司 成田佳穂 大庭直彦 大日方由美 岡至直 奥村尚子 小野佳信 大家しづ子 大河原透 大久保正紀 大澤睦雄 大塚勝利 尾崎正明 李家輝 佐波正一 齋藤比奈子 佐野好則 佐野友香 笹尾敏明 佐藤修二 柴田明一 柴山乃り子 清水恵 曾武川栄一 鈴木美南子 立川隆造 高橋正一 竹倉征嗣 田中慎一 遠峰喜代子 植木照代 黄鳳屏 八木良三 山ユミ 山本良一 山下美幸 大和洋一 矢野恭弘 芳野春生 吉富祐一 湯浅清文 湯浅太郎 容應英 平和管財(株) (株)共立メンテナンス (株)大岩マシナリー 大成建設(株) (株)竹中工務店 匿名13名

④5万円以上10万円未満 (個人：118名 法人・団体：2)

赤井尚子 網島真紀 安藤寿一 浅野令子 千澤忠彦 蔡正仁 古海美智子 二神史郎・桂子 二村克彦 儀賀裕理 羽鳥玲子 服部紀子 広瀬正宜 堀江保範 細井孝江 飯田慧子 碓知子 石川博紳 石川靖児 梶村健二 嘉数昇明 神永剛 金澤正剛 鹿島晴雄 勝山英司 河崎美佐子 河津真子 木部尚志 菊山英樹 古賀清敬 小森静 近藤朝子 近藤尚孝 小西正史 久保田康徳 倉田知幸 前田隆史 眞鍋徹也 増淵洋 松本史子 三沢正男 森真理子 宗像千代子 村井悦子 村谷貢 長埜紘 長尾真文 中村紀尚・豊美 中内俊一郎 中澤由紀子 並川顕 那須敬 西村佐二 新田美奈子 丹羽雅 野田雅子 野中千春 野崎昭弘 小田嶋寿一 小高正光 奥田暁子 大倉研 大須賀達雄 折笠安彦 尾関沢人 ティモシー・ライネイ 齋藤勝義 讃井暢子 佐々木満 里村恵子 柴沼明 重光碩 島貫秀之 品川日出夫 篠田浩平 添野恵里子 孫景富 砂子幸子 鈴木宏彦 鈴木良一・恵美子 立川明 竹内フミ 丹下正 寺阪娃子 富岡徹郎 上田富久子 宇佐美信次 和田伸雄 渡邊牧文 八木路子 柳下宙子 八端正紀 山田誠一 山口省之 山口富子 山本浩 山本雅子 山本美智留 山岡清二 米川佳伸 吉川公子 9期生有志 ICU86有志 匿名17名

⑤5万円未満 (個人：668名 法人・団体：7)

阿部世史之 足立正道 安達武雄 相原三保子 秋山紘 秋山毅 Altman由紀子 穴水重雄 安藤ヨウ子 青井明 青木眞理 青木正彦 青木励 荒垣敬 荒井宏師 新井三男 荒木昭彦 荒木祐一 荒瀬正彦・典子 有馬平古 有馬智子 尾藤淳司 千葉眞 千葉晃三 知花阿佐子 傳谷谷艶子 土居孝暢 堂上慎也 江幡清彦 江口洋樹 江崎裕子 堀江一郎 藤井秀穂 藤井浩 藤井浩幸 藤本豊治 藤村忠弘 藤澤典隆 藤田修吾 深谷茂 袋美光 福島有子 福島洋子 布能雄二 古林宏 古林信和 古畑とも子 古沢昭子 萩原久子 萩原均 濱田香苗 塙雅夫 原敦子 原一雄 原口みゆき 孕石健次 波里光彦 長谷川晶子 長谷川信彦 長谷川潮 橋本春美 橋本耕一郎 秦靖枝 秦道夫 畑山萃 八田陽子 服部亮二 服部惣一 早川博之・裕子 林賀子 林由利 樋口眞鈴 樋口順子 平野嗣和 広瀬暁子 広瀬啓子 一柳やすか 本田小吉 本田吉宏 堀美那子 堀川浩邦 堀川恵子 星野法昭・あゆみ 星野文子 細田千恵子 William W. Hunt 百海正一 兵頭圭介 井場洋子 市川智子 一政祐行 市村篤子 市ノ川尋 井口捷子 井口延 井口武夫 飯田緑 飯田徹 池田欣生 池末成明 池ノ内健司 池城康朗 生駒夏美 井熊芽久美 今田滋子 稲田茂雄 稲村倭子 井上優子 井上光正 犬飼佐智子 犬塚有紀 入江陸雄 石垣明子 石原謙治 石井保男 石井公則 石井潔 石村真紀 石渡文子 石山四郎 石坂欣也 石澤能子 石塚雅彦 磯部雄次 磯崎三喜年 板垣茂典 板浪幹夫 伊藤亜紀 伊藤英介 伊藤孝一 伊藤奈津子 伊藤精治 伊東辰彦 岩崎統子 岩田啓作 岩田みよ 岩坪慶憲 巖谷龍 泉信也 神保哲生 神内一郎 城野明子 鄭仁星 Kaiser賀名生 海蔵寺大成 梶田誠 鎌田敦子 亀田義憲 神山卓也 金井和子 金井敬子 金澤克子 神田昭太郎 金子保久 河北紳一郎 葛西淑子 鹿島良枝 片岡京子 片柳佐智子 加藤澄一 加藤浩 加藤まり子 加藤隼子 加藤徹男 加藤洋一 加藤義臣 勝原房子 マイケル・カワチ 川上浩子 河本万理子 木越純 木越恵子 菊池房恵 木村順子 木村智江 木村百合子 木室敬明 木下和之 吉良直人 桐原光洋 岸本幹生 北代淳二 橘川剛一 清河昌之 小林秀紀 小林弘 小林一夫 小林凌子 小林康修 小林牧人 河内博 木幡藤子 小井土美香 小池征男 小磯英津子 小泉恭子 小泉敬子 小島憲治 近藤圭子 小西新太郎 小西三郎 河野武彦・美代子 小柴早苗 好土崎裕子 小谷英文 古藤友子 小鷲茂 久保毅 久下良夫 国弘忠 国松幸子 倉智雅子 倉又奈保子 倉田彰子 栗原正道 栗原美智 栗山昌子 栗山容子 黒田清宏 黒田美佳 黒崎杏子 楠本潔 桑原弘 京谷邦寿 町田眞一 前田隆夫 前島達也 丸山忠司 正田純子 松原玲似子 松口啓子 松井則房 松井亮輔 松井友司 松本弘行 松本修 松本吉見 松岡路也 松下史緒 松浦貴子 松崎寿子 松崎加寿子 真弓武久 源了圓 三橋活也 三石貴啓 三矢恵津 三浦浩 三浦仁 三輪玲奈 三輪修珍 宮永國子 宮尾舜助 三好正夫 溝部久子 水田洋子 目代洋一 毛利勝彦 森川陽子 森本あんり 森本昌義 森本光生 森村成子 盛田和昭 森田啓子 森田重治 守戸清孝 守屋靖代 宗像雅輔 棟居勇 村上桂子 村中孝之・琴絵 村尾経子 村田玲子 長野一宇・由紀 永野俊行 長尾司 長岡宣好 長沢道子 長瀬徹 長瀧昌彦 内藤順敬 中川万里子 中嶋成博 中村昭博 中村紘 中村恵子 中村正子 中村奈奈子 中村良治 中田博人 中谷眞理子 中内俊作 中山順一 中澤伸元 七海允彦 南部恒孝 南川麻由子

直江和子 奈良詠子 成田耕治 成瀬健生 根岸修子 ニコソン(赤星)福子 新良穎子 新津政博 二宮信子 西田一郎 西原鈴子 西川武彦 西川昌弘 西野和子 西野桂子 西岡直俊 西山安彦 野口誠子 野島大輔 能島滋 野本和幸 野村彰男 野村和子 沼田善之 小原久美子 小原美紗子 越智直樹 落合チエ子 小田綾子 小田信昭 小笠原文男 緒方貞子 小川寿子 小川雅裕 小川直孝 小川友紀 小川沙織 大串和雄 及川郁郎 岡洋子 岡部美智 岡田裕司 岡田勝 岡田光弘 岡村幸男 岡崎正夫 奥田欣一 奥村浩徳 大倉秀夫 奥山幸猛 奥山諒子 大間哲 小野創 小野田真紀子 小野坂秀樹 大口晴子 大橋章 大河原康隆 大熊忠之 大森佐和 大野木泰子 大曾美恵子 大住猛雄 大坪寛子 大塚明子 織田秀和 押川昭 大角泰子 太田はるか 大友陽子 小澤伊久美 西條節 才田いづみ 斉藤剛毅 斎藤秀夫 斎藤和子 齋藤昌男 齊藤正 齊藤由利子 齋藤悦子 酒井圭一 酒井綱一郎 榊原建 坂倉文人 榊巻陽子 坂本恵子 坂田勉 阪田蓉子 酒寄美智子 迫川由和 左近和子 佐久間泰 佐久間百合子 山王廣子 佐野剛志 竿代誠二 佐々木倫子 左田野涉 佐藤綾子 佐藤真紀 佐藤允俊 佐藤晋作 佐藤達夫 佐藤洋一 佐藤是伸 佐藤豊 澤田創 澤本泰治 佐柳信男 関加奈恵 関直子 関奈津子 関隆郎 関原文子 瀬尾明雄 柴沼聡子 柴田恵美子 嶋香織 島敬二 志摩暁 島崎美登里 清水昭雄 清水信明 清水紀男 下前原隆 下村彰子 進藤龍一 信夫繁宏 塩田浩之 白澤深山 添田久夫 曾武川道子 末次崇 末澤史 末澤唯夫 菅沼美代子 菅田純子 杉原昇 杉澤浩子 杉田洋・恵美子 杉山明 杉山節子 鷺見徹也 住和子 住忠明 砂子隆央 須藤武 鈴木千鶴子 鈴木絲子 鈴木誠・祐子 鈴木美香子 鈴木小百合 鈴木時男 鈴木トシ子 鈴木祐子 田畑洋子 橋大介 田川雅代 田井恵美子 對間恵子 田近映子 高田哲夫 高木寿 高木美紗 高木佳年 高橋恵美子 高橋一生 高橋恒一 高橋浩太郎 高橋邦繁 高橋恂 高橋正子 高橋伸 高橋澄男 高橋早紀 高井ヘラー由紀 高井香央里 高井延幸 高松八千代 高梨徹 高杉葉子 高田棟吉 高山巖 竹上秋彦 竹内実 竹内ゆかり 竹安昌子 田村和生 田村靖子 田中昭子 田中恵理子 田中宏子 田中弘志 田中純子 田中貢 田中最代治・順子 田中武二 田中俱子 田中富子 谷口誠 田尾真由美 立石浩一 寺本美知子 照井博貴 照井孝 徳光伸二 泊さやか 戸澤正詔 坪沼邦生 円谷恵 土淵庄太郎 土屋隆一 土屋静子 津田幸子 津上麗子 辻井麻紀 角田達夫 津崎良典 内田克己 内山正明 上原弘子 上嶋啓子 上野優佳子 上野山恵理 鵜飼謙二 梅田みさ子 梅本公子 梅岡典之 梅津至 浦口あや 上部信夫 上矢瑛子 和田眞里 和田典子 和田重雄 和田武士 和田幸男 若林洋一 脇屋公 和栗雅子 渡辺敦子 渡辺待子 渡邊萬里子 渡辺聡 渡部秀一 渡辺隆 渡邊健 Mark Leon Weeks Woolley妙教 谷治由美子 矢嶋直規 山田英雄 山田祥子 山田珠江 山田智子 山口光 山口りん 山本晃 山本Carol 山本洋司 山本長幸 山崎光子 山下晶子 山下精一 家本昭徳 家本清美 柳澤毅 柳井尚子 矢野景子 八代尚宏 安田隆 八幡伸久 矢崎智章 矢澤澄子 横田謙 横塚祥隆 四方陽子 吉田豪 吉田由美子 吉村典男 吉村祥子 吉仲崇 吉岡順一 吉岡賢 吉岡元子 吉沢清 油井直次 10期前後のゴルフの会 14期生一同 2010年度卒業ICU西洋史ゼミ有志 ICU湯浅一郎記念館 ICUHS父母の会会長 ID86有志一同 東京冷機工業(株) 匿名83名

大学教育研究資金(在学生保護者寄付) 【個人：106名 総額18,880,000円】

後藤和也 大日方薫 新海秀俊 吉田正裕 宋東地 谷口郁代 松本泰三 荒川恭一 堂上慎也 池田健一 松岡義雄 中村秀雄 船水啓子 青木優 新居央行 坂野俊哉 江川純 藤村和美 藤岡仁 降旗繁弥 古里龍平 後藤晶子 原島規吉 本間智子 市吉裕二 飯山常成 石原重孝 石川裕司 石室正良 岩崎清英 金子豊光 狩野健夫 笠原洋夫 片岡龍郎 香取まさ子 川目裕 河野泰士 馬場和男 金南眞 小林政文 小南俊也 小西正芳 倉光泰隆 前田隆伸 真鍋伸二 榊田玲子 三木金房 盛田兼由 長澤達 永田重信 中道尚志 中島鉄夫 Henry E. Nelson 野崎泰 小野秀美 大塚敬 蔡明恵 佐野好則 佐藤弥彦 澁谷由紀 下休場千秋 塩田直子 曾我部修一 砂川博司 鈴木グリーン 歯科鈴木宏彦 多田裕昭 高井淳 竹内敬子 田内若夫 谷山雅計 塚本訓一 上間多聞 上西健一 和田伸雄 渡辺祐貴 横井利夫 吉積浩 湯川嘉昭 大平康治 福島昌弘 匿名26名

東ヶ崎潔記念ダイアログハウス募金 【個人：64名 法人・団体：68 総額15,329,413円】

国際ロータリー(個人) 64名

浅川皓司 伴よし子 藤原典子 花岡弘昌 原野勝至 橋本嗣雄 平岩共代 平山金吾 廣畑富雄 堀みゆき 稲生有伎子 石橋知子 石井義興 石山敏昭 伊藤千恵 神谷一雄 勝部哲男 河合克美 河村美德 川邊紀恵 木村安気子 木村眞 小林比奈子 児嶋三枝 松前憲典 松尾通 松島トモ子 水戸部賢治 物部宏太郎 森陽子 森尾稔 森島庸吉 長島祐司 中川康彦 西川祐美子 信山勝由 小幡敏之 岡部泰盛 大野宏樹 大島浩輔 大須賀洋 大塚崇行 酒井祐二 榊原節子 坂本俊雄 新藤信之 白崎裕 白鳥政孝 鈴木英之 田嶋孝造 田中徳尚 谷静子 辰野克彦 徳江陽子 土屋亮平 司葉子 都筑文男 内田長郷 内田啓子 梅田悦生 宇佐美博子 牛尾和夫 渡邊良勝 山内啓三郎

ロータリークラブ：以下RC 68クラブ

安城RC 浜田RC 東大阪東RC 広島安芸RC 広島城南RC 神奈川RC 松江東RC 新見RC 大阪RC 大阪東淀ちゃやまちRC 大阪中之島RC 大阪西南RC 大阪帝塚山RC 大阪東南RC 三条南RC 総社RC 天童RC 東京昭島RC 東京青山RC 東京麻布RC 東京調布RC 東京調布むらさきRC 東京中央RC 東京中央新RC 東京田園調布RC 東京田園調布緑RC 東京恵比寿RC 東京府中RC 東京銀座RC 東京八王子RC 東京八王子東RC 東京八王子北RC 東京八王子南RC 東京羽田RC 東京日野RC 東京広尾RC 東京城西RC 東京蒲田RC 東京神田RC 東京小金井さくらRC 東京港南RC 東京国立RC 東京マリーンRC 東京目黒RC 東京みなとRC 東京三鷹RC 東京武蔵野RC 東京日本橋RC 東京日本橋東RC 東京西RC 東京お茶の水RC 東京大森RC 東京大井RC 東京大崎RC 東京成城RC 東京成城新RC 東京西南RC 東京世田谷中央RC 東京世田谷RC 東京世田谷南RC 東京品川RC 東京品川中央RC 東京白金RC 東京立川RC 東京多摩RC 東京築地RC 苫小牧RC 八代南RC

その他の寄付 【個人：309名 法人・団体：6 総額119,939,623円】

(株)朝日新聞社 ICU高等学校父母の会 ICU高等学校2012年3月卒業生 Japan ICU Foundation
The Rotary Foundation of Rotary International 鈴木誠 土屋静子 United Board for Christian Higher Education in Asia 図書寄贈者307名

Japan ICU Foundation Contributors JICUF寄付者ご芳名
[278 contributors total amount US\$220,787.60]
\$5,000 and over (7 donors)

Atsuko & Akira Fujimoto, James & Jini Galloway, Yasuyuki & Judy Owada, James Tollefson, Lin & David Vikner, ICU Alumni Association in the Americas, United Methodist Committee On Relief.

\$2,000 to \$4,999 (15 donors)

Po-chuen & Lillian Chan, Benjamin & June Duke, Henry D. Fisher, Yasuyuki & Donna Horie, Violet H. Kuroki, Ruey Yang Liao, Peter & Amy Prahar, Senator John D. Rockefeller IV, The Roeloffs, Chi-Hung Siu, Joshua Wong, Joel K. Wong, Louise & Laurence Woodruff, Weimin (George) Yuan, Erick Williams Memorial Fund.

\$1,000 to \$1,999 (21 donors)

Thomas L. Benson, David T. Chan, Laura Chiu & Shin-Cheng Simon, Steven Ericson, Fumiko Harada, Noriko Iwase, Pichon P. Y. Loh, Jeff Lucas, Yoshiro Matsuo, Fusae & Yuzuru Nara, John Pearson, Keiko Sato, Hayao Shiraishi, John Coventry Smith, Jr., Tait, Weller & Baker, LLP, Roy & Ute Tellini, Curtis W. & Jinx Tong, Reiko Wada, George Ken-Hsi & May Yung-Fun Wang, George Yu & Lotus Leong, Freeport International Baseball Invitational.

\$500 to \$999 (32 donors)

Takeshi Amemiya, Robin K. Avery, Hatsuya Azumi, Clifford H. Clarke, Akiko Clayton, Tara DeWorsop, Namiko Golden, Danny Ha, Mitsuhiro & Kaede Kaneda, Koaki B. Harris, William Hsueh, Allan Hinglun Lee, Joseph Yuen Chor & Nelly Lee, George & Joan Lewis, Tip Kan Chan Lin, Kazuko & Chad Love, Anne Love, Peter & Yukari McCagg, Nakako Memon, Hiroko Morita Lou, Yuichi Nakagawa, Atsuko J. Rasic, Delores & Jon Roeder, Thomas Schoenbaum, Tomoko (Tina) Takahashi, Sandra Tennyson, RCW Treadway Earthcare Fund, Joan M. Uht, College Club of Ridgewood, Eiken-American Cultural Exchange, Freddie Mac Foundation, J.U. & Hazel Simmons Scholarship Fund.

\$100 to \$499 (139 donors)

Akiko Abley, Chihae Arafune, Michael H. Armacost, Arline Beddow, Catherine Bell, Kimiko Bokura, Satomi M. Bol, Bill & Margaret Borock, Lucile Burkett, Barbara Larson Cambridge, Maria Tseng Chen, Paul P. W. Cheng, Raymond & Dorothy Cochran, Dianne Cowen, Susan B. Dahiya, Kenneth & Eloise Dale, Betsy Damon, Mikiko Davis, Wilma S. Davis, Katherine Durgin, Stephen Dyer, Misayoshi Ebato, Yoko Murayama Eide, John & Susan Floreen, Yuko Folgate, Frank & Ruth Gamelin, Roger & Lois Geeslin, Dorothy S. Gibbs, Owen Gingerich, Emily Gleason, Dorothy Goldman, Barbara Goodrich Clark, Mary & Edwin Hartman, Paul Hastings & Debbie Wissel, Thomas & Carol Hastings, Kenji Hayao, Dorothy Helm, Glenn Helme, Tomoka Higuchi McElwain, Clifford & Kathleen Hill, Eleanore Hire, Saneteru & Hisako Hirose, William F. Honaman, John Howes, Yoshikuni Igarashi, Shoji Kent Ikeda, Miki Ishida, Junko Murray, Chieko Ishii, Lena Iwai, Machiko Izawa, David & Patty Janes, Joel & Peggy Johnson, Donald S. Johnston, Michiko Kawashima, J. Edward Kidder, Jr., Utari Kitaoka, Edward Krebs, Evelyn Kreider, Brian Y. Kubo, Yuriko Kuchiki, Dick Lammers, Phyllis H. Larson, Edward Lenci, William & Jean Leshner, Lafayette D. Mathews, III, Margery L. Mayer, Beverly McLeod, Elizabeth Winn Meyer, Kuniko Mitrovic, Takako Miyazaki, Hiroshi & Ikuko Mizukami, Yasuko Moyer, Naoki Murayama, Asako Nagakura, Sawa Nakagawa, Yuka Nakamura, Bob & Shio Northup, James Novak, Samuel O. Nukazawa, Akira Odani, Nobuko Ohashi Wilson, Kenichi Ohtaka, Yoko Oka, Kiyo Okazaki, Izumi Osawa-Minevich, Dorothy Ouzidane, Kazuko Page, Keiko & Mike Paros, Dennis Peterson, Jeffrey & Akiko Poel, Sergio Pulido, Yuko Kadota Pullen, Mary & V. Bruce Rigdon, Trish Rubin, John Runde, Kazuya Sato, Lona C. Sato, Jim Scherer, George & Etsuko Schulenberg, Toru Shibata, Motoko Shimizu, Kazuko Shimizu, Seiichi Shinomiya, Hallam C. Shorrock, Jr., Richard Singer, Arne Sovik, Gordon Sugimoto, Sakura Suzuki, Hiroyoshi Taguchi, Valerie Hoffman Takai, Takashi Takekawa, Kentaro Tanizumi, Miyo Tat, Leonard Tate, Dorothy G. Thomason, Masako Tilley, Rei Tilton, Kurt Tong & Mika Marumoto, Lawrence & Joanna Tsuyuki, Takeshi Ueshima, Kenichi & Deborah Ujie, Frederic & Cheri Uno, Amy Oda Uyemura, George J. Vojta, Kazue Watlington, Raymond & Hanako Weitzman, Eric Wells, Donald Wilson, Kano & Masako Yamamoto, Satoshi Yamamura, Michael Yochum & Priscilla Otani, Emma Lee Yu, April Manzinger Fund, The Brick Presbyterian Church, JP Morgan Chase Foundation, Minnesota Historical Society, Chevron Humankind Program, Wells Fargo Bank.

Donors below \$100 (64 donors)

Carolyn Around, Jason Asbury, Carl & Marie Bade, John O. Barksdale, Ruth C. Bergman, Regis & Marilyn Birkbichler, Cornelia T. Bowe, Ida Braden, Harry Brunger, Charles Burkhart, Emily C. Jackson, Lynn C. Cohee, Francis Collin, Ayako S. Cone, F. Hilary Conroy, Byron Crozier, Jr., Mary Virginia Culbertson, Carmen Dagnino, Harold Deal, Walter L. DeVries, Ronald Drabkin, Susan Duke, Wilbert M. Ericson, Jonathan Furuya, Quentin & Christa Gamelin, Charles & Julia Germany, Andrew J. Glazier, Marilyn Gordon, Dale & Karen Haworth, Evelyn A. Headen, Ellen Hinnenkamp, William & Colleen Huckabee, Tomoko Ichikawa, Nick & Rhoda Iyoya, Janet Kinney, Fukuko Kobayashi, Hiroko Konishi, Matthew A. Kraus, William Kuyper, Jerry & Jan Livingston, Norm Lund, Gale D. Lynch, Elizabeth Curtis, Louise W. Marker, Shiho Mashiko, John G. McCaleb, Nadine McCarty, Andrew S. Neuman, Anita Patel, Jessica Pearson, Joseph Perez, Kazumi & Robert Pestka, Jean F. Platt, Katherine Reyes, Miyoko Rokumoto, John E. Rosenbaum, Michiko Saijo, Kurt & Leslie Thompson, Yoichi Usui, Yohei Yamane, Warm Heart Worldwide, Inc., Anonymous (3).

新 ICU Peace Bell Scholar の紹介

第5期「ICU Peace Bell 奨学金」の4月入学生受給者が決定しました。2012年度からは年間100万円、4年間で400万円が支給される通常枠に加えて、授業料と施設費を原則として4年間免除し、さらに本学学生寮への入寮費や寮費を免除する特別枠を新設。今年度は通常枠6名と特別枠4名が採用されました。

授与式は4月6日、学内アラムナイハウスで行われ、日比谷潤子学長から一人一人に奨学生証が手渡されました。学長は「皆さんの高い志を活かし、将来、自分の受けた恵みを他者に還元する方法を考えて欲しい」とスカラー（奨学生）への思いを述べました。昨年の授与式は震災の影響により縮小されましたが、今年は寄付者や2年次以上のスカラーも参列し、例年どおりの授与式となりました。式後に行われた懇親会では新スカラーの緊張も解け、笑顔で会話を楽しみました。



榎堀 秀耶

ENOKIBORI, Shuya
奈良女子大学附属
中等教育学校卒（奈良県）

奨学生証はペラペラの紙切れにすぎませんが、授与された瞬間、手のひらにずしりと形而上的な「重み」を感じました。——平和への願いが集結し、自分はICUで学ぶことを許された。鐘の音が学内に鳴り響く。“LET THEM SEEK PEACE AND PURSUIT IT（平和を求めて、これを追え）”の言葉を胸に世界の舞台へと繰り出して、学問の究極的な目的である知のバトンをつなぐリレー、「還元」の作業に参加し、平和の音を奏でる地球市民に、私はなりたい。



小林 英太郎

KOBAYASHI, Eitaro
鶴丸高校卒
（鹿児島県）

この度、Peace Bell Scholarという大変な榮譽をいただけて、本当に感謝しています。私たちに求められている理想の高さを考えると、本当に自分ではいいのだろうかと不安になることもあります。けれども、私たちを選んでくださった皆様の期待に応えるべく大学生活を十二分に謳歌して、ICUを引っ張っていける存在になりたいと思います。そしてゆくゆくは、日本のみならず世界のために尽くしていきます。



三浦 はる花

MIURA, Haruka
国際基督教大学高校卒
（東京都）

授与式では寄付者の方にお会いし、奨学生としての責任と自分が多くの人に支えられていることを改めて感じました。大学生活が始まってまだ手探りの状態ですが、新しい環境にも少しずつ慣れて毎日を楽しんでいます。大学での4年間は今までよりも自由がある分それをうまく使えるかは自分にかかっていると思うので、学業やクラブ活動、寮生活においてもすべてを糧に自分を磨いて、奨学生として恥ずかしくない人間になれるように努力します。



西原 善培

NISHIHARA, Sombe
田園調布高校卒
（東京都）

先日Peace Bell Scholarとなりました。もし奨学金がなければきっと私はICUを諦めなければいけなかったでしょう。けれども多くの人の善意で私は今ここにいます。いることができます。今は感謝の気持ち以外に、私が持つものはありません。しかし私の名は善培。いつかきっと、自分の名のように、今日頂いた善意を私の中で培って、より多くの人に繋げていきたいです。それがきっと、私に名前をつけた両親の願いであり、私の使命です。

Introducing 2012 April ICU Peace Bell Scholars

Recipients of the 5th ICU Peace Bell Scholarship have been finalized for the April freshmen. In addition to the conventional scholarship fund of one million yen per year, totaling four million yen for four years, special provisions were newly created from 2012, which basically exempt all tuition and facility fees for four years, as well as dormitory admission fees and dormitory fees. Six students were selected for conventional scholarships, and special provisions were awarded to four students.

Shuya Enokibori (Nara Women's University Secondary School, Nara)
Taking part in passing the torch of knowledge, a reciprocating process and the ultimate purpose of learning, I want to be a global citizen who plays music for peace.

Eitaro Kobayashi (Kagoshima Prefectural Tsurumaru Senior High School, Kagoshima)
I would like to enjoy university life to the fullest, and become something of a driving force at ICU. I hope to eventually dedicate myself not just to Japan but to the world.

Haruka Miura (ICU High School, Tokyo)
I would like to refine myself by taking in everything from all aspects of university life (academics, club activities, dormitory life), and strive to become a person worthy of this scholarship.

Sombe Nishihara (Tokyo Metropolitan Den En Chofu Senior High School, Tokyo)
I would have had to give up the idea of coming to ICU were it not for the scholarship. I am here thanks to the goodwill of so many people. I have no other feeling than that of gratitude.



小田 つかさ

ODA, Tsukasa
横須賀高校卒
(神奈川県)

Peace Bell奨学金と言う、大変貴重で、寄付してくださったICU卒業生の方々の思いがこもった奨学金を、授与していただきました。授与式までは大学生になることや、新生活を始めることへの期待と不安でいっぱいでしたが、奨学生証をいただいたとき、「不安になってなんかいられない、奨学金でいただいた大学生活を、どう意義のあるものにしていこうか」と言う思いでいっぱいになりました。ICUでは開発研究や国際関係学を学び、世界の貧困や飢餓を少しでも改善できるよう、努めていきたいと思っています。



清藤 史織

SEITOU, Shiori
女子学院高校卒
(東京都)

この度Peace Bell Scholarとして選んでいただきましたことを大変光栄に思います。またご支援頂いている皆様に心より感謝申し上げます。ICUの魅力は様々な分野から授業を選択できることだと思います。現在興味を抱いております哲学、宗教、歴史、国際関係などの分野の授業を選択しながら学問領域を超えて広く知識を修め、多様な視点から問題解決に取り組めるような人材となって私が与えられてきた恵みを社会に還元していきたいと考えております。



若井 麻理子

WAKAI, Mariko
桜蔭高校卒
(東京都)

この度はPeace Bell Scholarに選んでいただいたことに心から感謝致します。授与式の会場で実際に寄付者の方々、教職員の方々、また先輩方にお会いし、自分が奨学生となったことを改めて実感しました。この4年間では現代社会で生きるための教養を身につけ、社会に貢献できる人間となれるよう自分の進むべき道を見つけていきたいです。この素晴らしい環境で教育を受ける機会をくださった関係者の方々への感謝と責任を忘れずにICUでの生活を充実したものにしたいと思っています。



大山 ゆきの

OHYAMA, Yukino
北星学園女子中学高校卒
(北海道)

Peace Bell Scholarとして選んでいただき感謝の気持ちでいっぱいです。ICUへの進学は神様が開いてくださった道だと信じて日々努力し、サークルや留学など様々な活動に取り組みたいです。ICUでは言語学を他のメジャーと複合的に学び、将来は少数民族の方に聖書翻訳を通して福音を伝える仕事に就きたいと考えています。そして世界平和に貢献できる人、「神と人にと奉仕する」人になれるよう努力していきます。



志賀 アリカ

SHIGA, Arika
国際高校卒
(東京都)

この度はPeace Bell Scholarに選んで頂き有り難うございます。感謝と喜びで胸一杯であると共に責務に身が引き締まる思いです。私は勉学に励むのは勿論、「大学生だからこそ出来る方法」で社会活動に力を入れていきたいと思っています。子どもと大人の中間の世代、幅広い世代へのアプローチが可能な「今」だからこそ出来ること…それを常に模索し、挑戦していきたいです。ICUの仲間達と切磋琢磨し、時にリーダー、時に良きフォロワーとなって、校内に良いうねりを作っていけるよう頑張ります。



張 曦譽

ZHANG, Xiyu
常磐大学高校卒
(茨城県)

Peace Bell奨学金を頂けると分かったとき、驚きと嬉しさと共に在校生のお手本となる行動や役目を果たさなくてはならないという不安やプレッシャーがありました。しかし、奨学金を寄付くださった方々の暖かい思いに感動し、辛いことや苦しいことに直面した時でも乗り越えられる気持ちになりました。大学生活は始まったばかりですが、勉学はもちろんのこと、課外活動にも力を入れ、これからの毎日を充実したものにし、精一杯努力していきたいです。

Tsukasa Oda (Kanagawa Prefectural Yokosuka High School, Kanagawa)

I want to study Development Research and International Relations at ICU, and endeavor to solve world poverty and famine even if only slightly.

Yukino Ohyama (Hokusei Gakuen Girls' Junior & Senior High School, Hokkaido)

I would like to study Linguistics along with other majors, and in the future work in the field of preaching gospel through translation of the Bible to ethnic minorities.

Shiori Seitou (Joshigakuin Senior High School, Tokyo)

My goal is to become a talent that can undertake the task of solving problems from various perspectives, and give back the blessings I have received from society.

Arika Shiga (Tokyo Metropolitan Kokusai High School, Tokyo)

I hope to strive hard and learn from my fellow ICU students, at times being a leader and at other times being a good follower, and go all-out to create a good atmosphere on campus.

Mariko Wakai (Oin High School, Tokyo)

Never forgetting the appreciation I have for the people who gave me the opportunity to receive an education at this wonderful institution, and keeping in mind the responsibility that comes with it, I want to make full use of the opportunities afforded me at ICU.

Xiyu Zhang (Tokiwa University High School, Ibaraki)

Not to mention academic studies, I also want to stress after school activities. I aspire to make the days to come fruitful by maximizing my efforts.



伊万里徳利付螺鈿提重
(いまりとくりつきらでんさげじゅう)

Portable Food Box with Mother of Pearl
Inlay and Blue and White Sake Bottle
H.32 W.38 D.25 cm

はこぶ知恵

Packables and Portables

提重とは、4～5人分の酒の肴が入る重箱、銘々皿、酒筒や盃などの酒器を携行できるように、持ち手の付いた外枠の中におさめたものである。花見重、野弁当とも呼ばれ、観劇、お花見、紅葉狩り、お月見や夕涼みなど、四季折々の物見遊山の際に活躍した。ハレの器として、近世の風俗画や名所図などに多く描かれている。外枠の形、文様、開閉や収納方式などに様々な工夫を凝らしたものが多く作られ、貴族階級は豪華な装飾を施したものを持参し、庶民は、ごくシンプルで、あまり飾りのないものを使った。

当館では7月13日(金)まで「はこぶ知恵」と題し、所蔵資料からこの提重はじめ、コンパクトに収納したり、持ち運びやすくする工夫が施された道具や弁当箱を展示している。

Sageju are wooden and lacquered portable food boxes intended to carry small dishes, sake bottles, and stacked food boxes usually designed for four to five portions. They became popular in the mid-Edo period for people going to theaters and festivals, viewing cherry blossoms and maple leaves, and planning picnics for seasonal gatherings. Their use is depicted in numerous genre paintings and folding screens. Many different shapes, sizes, designs, storage and nesting systems were created, resulting in a wide range of variety. Highly decorated picnic sets were made for upper class people, while simple, functional ones were made for commoners.

Special exhibition entitled "Packables and Portables" is currently on show (until Friday, July 13) featuring utensils and lunch boxes from the Museum collection. The food box shown here is on display as well.

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館
ICU HACHIRO YUASA MEMORIAL MUSEUM

http://subsite.icu.ac.jp/yuasa_museum/

開館：午前10時～午後5時(土曜は午後4時30分まで)
休館：日曜・月曜・祝祭日・展示準備期間・夏期休暇中および年末年始
入館：無料

HOURS: 10:00 a.m. - 5:00 p.m. (closes at 4:30 p.m. on Saturday)
CLOSED: Sunday, Monday, national holidays and on special days when the University offices are closed

ADMISSION: Free